

「第20回 さくらサミット in 各務原」

会議録

平成24年4月9日(月)
各務原市産業文化センター「あすかホール」

主催 / 岐阜県各務原市、財団法人自治総合センター
後援 / 総務省、岐阜県

【主催者挨拶】各務原市長 森 真

皆さん、こんにちは。

今日は全国から桜自慢の 14 市町の皆さんをお迎えしました。また、岐阜県から渚上副知事、そして全国さくらサミットのコーディネーターである元岐阜県副知事の篠田さん、相変わらず派手なネクタイだ（笑）。それから、何より大事な市民の皆さんと一緒に、これから全国さくらサミットを始めさせていただきたいと存じます。

楽しい会にしたいと思いますので、どうぞよろしく申し上げます。開会のご挨拶といたします。ありがとうございました。（拍手）

【来賓挨拶】 岐阜県副知事 淵上俊則 氏

ただいまご紹介をいただきました、岐阜県副知事の淵上です。一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

本日、桜が満開の中で第 20 回の節目のさくらサミットが、ここ各務原市で開催されることを心よりお喜び申し上げます。昨年、3.11 の東日本大震災で延期になったと聞いています。そして、今日このような桜が満開の日に開催できますこと、感慨ひとしおのものがあると思います。

昨日、交流会があったのですが、そこで格調の高い話を各市町のご参会の皆さま方からお聞かせいただきました。やはり桜は日本の花です。小倉百人一首というものがありますが、この中に 100 のうち桜を詠んだ歌が六つあるそうです。そして、吉野町の方もご臨席ですが、桜を詠んだ歌人といえば、やはり何といても西行だと思えます。いま「平清盛」が放送中です。第 10 回の「義清散る」だったと思えますが、諸説あるらしいのですけれども待賢門院璋子に失恋をして、出家をしたと言われていました。

いま満開の桜が大変きれいです。一方で、満開して数日すると、あっという間に散ってしまう。そういうことからはかなさ、あるいは散り際のよさということで、いろいろな例えに使われるわけです。最も美しいところで消えてしまうのは、大変悲しいと同時に美しい思い出をつくるものです。

そういう意味で、先ほどの西行で言うと、散り際の心の揺れ動くさまを詠んだ歌もあります。「春風の 花を散らすと 見る夢は さめても胸の さわぐなりけり」。

桜がそれぞれの地域の誇れる財産であり、それを守り育てることは大変貴重なものだと思います。昨日の交流会でいろいろと話を承っていると、桜の木も大切に育てると、長く長く命を保つということです。ぜひ、それぞれの知恵を持ち合い、今ある桜を 1 日でも長く、そして新たな桜をどんどん増やし、そしてそれぞれの地域のアイデンティティになるような桜としていただきたいと思えます。

終わりに、今回の第 20 回のサミットが成功裏に終了しますこと、そしてご参会の皆さま方のご健勝とご多幸を祈念して、ご挨拶とします。どうもありがとうございました。(拍手)

【記念講演「桜の魔力と桜守」】 岐阜大学名誉教授 林 進 氏

今日は桜満開のさくらサミット、つくってもなかなかできない機会だと感激しています。5日に東京の千代田区で桜のシンポジウムがあり、そのときには千鳥ヶ淵から日本武道館にかけてのお堀端の桜が満開でした。東海道新幹線で帰ってくる東海道筋、ずっと桜ですね。日本全国、桜が同時に咲くことはないのですが、全国的に桜が咲いているような、そういう気分になります。

私は隣の犬山市に住んでいますが、京都から岐阜大学に赴任したとき、大学は市民公園のところにありましたので、しばらく各務原市に住んでいました。したがって、新境川近辺の桜を毎年眺めて過ごしたわけです。森市長から、「百十郎桜を何とか元気にしてほしい」と依頼され、それ以来ボランティアの方々と一緒に、特に秋深まって冬にかけて桜の剪定等を行っています。

先ほど、歌でこのサミットが始まりました。本題に入る前に、桜の色について少しお話しさせていただきます。私はいま親しい友人たちと草木染めをやるとうことで、しかも媒染剤を使わないで自然の状態で染める場合に桜色をどうやって出すか、考えてみたわけです。これは私が染めたものですが、きれいな桜色です。ちょっと濃いかと思いますが、桜色のイメージで。材料はユニクロで990円で買ってきた白いショールですが、どういう素材で染まるかというのと、桜の花で桜色は出せません。

これは椿の花で染めたものです。なぜ椿の花で染めようと思ったかと申し上げますと、初代・安達瞳子さん、うちを飛び出して安達流を始められた女性ですが、彼女が行き着いた先は桜と椿を生けることでした。桜と椿、いずれも華道界のタブーでした。しかし、桜と椿は合わせて見ると、すごく印象的な組み合わせになります。最近はそれに竹も交えられて大胆に生けられています。桜はパツと散る、椿はポトンと落ちる。いずれも散り際が非常に印象的です。桜は散った花びらが美しい。椿も落ちた花が美しい。ヨレヨレになって散らない。そういう意味で、まさに命の流れというものを表していると思います。

私が瞳子さんにお話を伺ったときに、さまざまな思いを語られました。その時語られた桜と椿の合わせ方が印象に残っていたので、それで、椿で桜色を出せるはずだということを出してみたのが、この色です。やってみてください。水でも十分出ますし、煮出しでも出ます。アルコールでも出ます。日本酒よりも、少しきつい焼酎のほうがよく出ます。

色というものは、本来隠れたものです。色にかかわるということは、隠れたものをどう

やって引き出すのか、あるいは、見えないものをどのように見るか、そういうことにつながっていくのではないかと思います。そういう意味で自然との関わり、自然のものとの関わりの一つのつながりとして、私は草木染めにかかわり、いろいろな植物の持っている本来の色とはどういうものだろうかということを探っていこうとしています。その先に、心の世界にまで踏み込んだ、桜と人とのつながりも見えてくるのではないかと思います。

今日は「桜の魔力と桜守」というテーマにさせていただきました。レジュメに書いてあることと少し重なる部分もありますが、ほとんど重なりません。それから、桜の映像や写真は一切使いません。皆さん方がこだわりの桜、自分のまぶたに浮かぶ桜が必ずあると思います。何力所かあると思います。それを思い浮かべながら、なぜ自分が桜を愛するのか、なぜ桜に引かれるのか。そういうことを考えていただきたいため、私のカメラを通した桜の映像は一切お出ししないことに決めていますので、よろしくお願いします。

桜の持つ二面性

桜守という言葉は、水上勉さんの小説『櫻守』に使われてから、ずっと一般化されています。桜というのは、考えてみると非常に不思議な花です。世の中には花がたくさんありますが、桜に関わるいろいろな物語があり、いろいろな思いがある。これだけの花は、他にはないのではないかと思います。あるときには非常にいとおしく感じる。心が浮き立つ。あるいは、心が沈む。何か慕わしげに、そしてときには狂おしいほどに私たちの感情に訴えてくる、そういう花です。こういう花は他にはないと思います。桜が咲く、やっと春がきた。しかし、やがて散る。

俳句の季語は、もともと自然の移ろいに対する愛惜の情をうつした言葉です。桜は愛惜とでも言ってもいいでしょうか、それを感じさせる花です。他にそういう感慨に浸る花は少ないのではないかと私はそう思います。散り際には、なお一層そういう感が深まります。「ああ、散ってしまうのか」と思うのと、「もう少し、このままでいてほしいな」と思う散り際の美しさ。新境川もそうですが、特に川沿いの桜は川面一面が桜の花びらで真っ白に流れる。散り際の花は少し白みがかかります。そういう風景を見ると、また来年の春を楽しむにやる心と、今年の春が行く惜しむ心、寂しさを同時に感じさせます。

朝の桜は非常によく香ります。ゆうべの桜は少し沈んで見える。本居宣長が「朝日に匂う山桜花」と詠んだのは、彼は朝、早起きしたのでしょうか。本当は、山桜は朝に強く香ります。夕方はあまり香らない。桜の花は季節の移ろいを示すとともに、1日の時間の移

ろいも見事に示してくれると思います。それとともに、人の心も移りゆきます。

見納めに 妻とたずねし 夕桜 (亜南)

私のつくった俳句で、亜南とは私の俳号です。夕方に出かけたので、その雰囲気を考えてつくりました。シベリアに研究のため出張する前に、帰ってきたらもう桜が散っているから見に行こうという妻の誘いで一緒に出かけ、犬山城からの桜を詠みました。夕桜が、非常にいい桜風情を醸し出してくれていたことを記憶しています。

考えてみると、桜の花は正の部分と負の部分、両方あります。再生の花であり、パッと散るということで死の花、死を表現するということをする人もいます。梶井基次郎は『檸檬』という小説の中で、「桜の木の下には死体が埋まっている」と表現しました。現実には、桜の下がお墓であるというケースはずいぶんあります。桜にとって、カルシウムやミネラル成分はすごくいいのです。花咲かじいさんのまいた灰は骨粉ですが、基次郎の発想はまんざらの外れではないと思います。そういう点で、ある面では非常に明るい、ある面では非常に暗い面を持っています。

特に、軍国時代には「咲いた花なら散るのは覚悟」という歌がつけられたくらい正と負、相反する感慨をもたらす花です。待ちわびていたのに短い間しか咲かないということもあるかと思いますが。別れ、あるいは別の意味の「分かれ」を重ねてしまう花です。やっと咲いたのにもう散るのかという感慨、まさに正と負、相反する感慨をもたらす花です。ここに関わっているいろいろな歌が詠まれ、いろいろな文学が生まれ、さまざまな芸術が生まれ、あるいは吉野熊野の修験道が生まれたと言えます。

桜の季節は人の心もまた、揺れ動く時季です。だいたい今ごろから若葉が出るころ、人間の心が一番変動する季節です。植物と同じように、季節に合わせて命がつながっていると考えていいかと思います。じっと耐えたところから一気に跳ねだす生命、躍動の流れの中だからこそ、心も体も非常に大きく揺れ動くのです。

西行と桜

よく桜の話をされる場合に、『源氏物語』を引き合いに出されるケースが多いです。光源氏は桜の化身として描かれ、紫式部もかなりの桜狂いだったということが伝わっています。今日は源氏でなく佐藤義清(西行法師)をメインテーマにしたいと思います。なぜかというと、佐藤一族の領地は、紀ノ川ほとりの田仲荘というところなんです。実は、私一族のふるさとです。彼が紀ノ川を眺めて感じたこと、私も紀ノ川を見て子どものころ育ってい

るので、そういう点で非常に近い人物だと思っています。

紫式部ではなく、佐藤義清。ちょうど「平清盛」のはじめのほうで出てきましたが、咲き誇る桜のもとで離合集散と争乱の世をくぐりぬけ、そこで森羅万象の光に満ちた世界を見ようとしたのが佐藤義清です。

いろいろな伝説が伝わっていますが、子どもを縁側から蹴飛ばして出て行ったというのは、うそだと思います。彼は完全に政略結婚をさせられたのです。だから、結婚生活はあまり幸せではなかったようです。そういうことと、身内の死、争乱の世での多くの人の死を見つめた末に、家族を含む俗世を捨てる覚悟を定めたのです。その時、恐らくは、はらはらと花びらが降り注いでいたでしょう。テレビの画面がそうになっていましたが、咲き誇る桜樹の下で、俗世の塵を洗い流す旅に出る心を定め、そして自分の歌のままに、桜に包まれる如月の望月の頃世を去ったのが、西行という人です。

そこで、円位上人・西行を通して桜の魅力と魔力を探ってみたいと思います。

天治元年(1124年)、中宮璋子は白河法皇、鳥羽院とともに法勝寺の満開の桜の下で宴に興じていました。そのときの余興の流鏑馬で、抜群の技を見せたのが佐藤義清だったわけです。それで呼ばれて褒美にあずかる際、義清は女院に拝謁をした。黒髪に囲まれたそのお顔は、亡き母みゆきの前にうり二つであった。そういう関係にあります。この年11月に璋子の院号を「待賢門院」とした。義清が初めて会ったときには、まだ中宮璋子だったわけです。二人にはそういうつながりがあります。

桜の下での出会い、咲き誇る桜の法勝寺での出会い。ことごとく義清には桜がついて回ります。それ以来、この世に中宮璋子以外に慕わしい者はいなくなった。自分の母を愛したと同程度以上に、璋子を愛したわけです。慕わしく、しかし添い遂げることは決してできない、狂おしいまでの出会い。桜の下でこそ生まれた恋心だろうと思います。桜でなければこの場面は合わない、そのように考えていいと思います。

このときの宴は、非常に華やかだったようです。確執を続けていた白河法皇と鳥羽院が同席した。以後ずっと、鳥羽院は白河法皇の呪縛にからめとられっぱなしで過ごしていくわけですが、このときは同席し、華やかな宴を開いたのです。このことをも含めて、同席していた藤原一族の藤原秋実の妹・兵衛が、「よろづ代の ためしと見ゆる 花の色を うつしとどめよ 白河の水」という歌を詠んだわけです。これ以後、世の中は争乱の世に移っていく。平清盛の時代に至るまで、争乱の世に移っていくわけです。そういう感慨を花に託して詠まれた歌です。

辻邦生という作家は文体がきれいな人で、私の好きな作家の一人です。谷崎潤一郎賞をもらった『西行花伝』という、かなり分厚い本があります。その描写を借りると、まさに桜が見事に描写されている。桜の下で二人が出会う。その意味も見事に描写していると言っているかと思えます。

三条京極第というところで、宵明かりに浮かぶ桜。まさに夜桜です。月の光が桜の紅を奪う。その光の下に座っていた女院。こういう場面です。弓張り月の光の中で、池のほとりの桜が白い影となって闇から浮かぶ。『死も何も、この一瞬の中に溶けていた。白い歓喜の光の中で、私は幾世もの末を生き抜いていると感じた』。西行がこう感じただろうと、辻邦生が描写しているわけです。「弓張の 月に外れて 見し影の やさしかりしは いつか忘れん」、このときの出会いを、西行は後年こう詠んでいます。

まさにぴったりの取り合わせです。弓張り月の光、その中で定かならぬ闇からふっと浮かんでいる花、それが桜。まさにぞっとするような桜の美しさを描写して余りある表現だろうと思えます。

このような体験を通じて義清は、争乱の世、悲しみの世の中で、あるとき突然に山川草木の持つ慈悲の香りを感じ取っていくのです。重ねる桜との出会いが、その感性を義清に与えたのではないのでしょうか。

義清が世を捨て、しかし現世（うつしよ）と行き来するわけですが、それをつなぐ存在が桜であった。また、現世（うつしよ）と全然違う世界、もっと穏やかな世界をつなぐ存在も桜であった。そのように言えます。心の中では浮世を出て、森羅万象の美を見ようとした義清ですが、自分の魂を救うために恩愛の絆を絶ち、森羅万象の美の世界に歩まなければならなかった。彼は決して、仏道を究めようとして出家したのではない。森羅万象のありのままの美しさを見たい、それを感じ取りたい。だからこそ、争乱の世、悲しみの世を抜け出し、もっと光り輝く世界があるのだらうと決心したわけです。そのとき、彼の目には紀ノ川が光り輝いて見えたと伝えられています。

「山深く 心はかねて おくりてき 身こそ 憂き世を 出でやらねども」、あるいは「捨てがたき 思ひなれども 捨てて出でむ まことの道ぞ まことなるべき」。心に決めたとはいえ、心の葛藤を表しています。義清 23 歳、桜満開の匂やかな朝に大日如来の光に向かう人生の旅に出た。義清は、そういう人生の歩みを過ごそうとしたわけです。

武芸にも秀で、歌の道にも秀で、なおかつ自然の姿、中でも桜の持つ非常に深い味わい、魔力、魅力、死と再生を同時に示すことを感じ取る、そういう心を持ち合わせた素晴らし

い人物であったと言っているかと思えます。

義清出家の意味は良き仏僧になるためではない。あるいは、名のある戒師につくことでもない。求めようとするには、自らの退路を断ち、生きながら異界へ出ることを自らに命じることでしか近づけない、そう考えて俗形を捨てたのです。普通の姿かたちでもできるのではないかと、私などはそう考えたいのですが、しかし形を捨てなければ心は変わらないと彼は考えたわけです。

「世の中を 背きはてぬと、言ひ置かん 思ひしるべき 人はなくとも」という歌の中に、自分の決心をすべて込めています。だから、世を捨てるのではない。懐かしく、うれしいこの世の花と月を、狂おしいまでに抱きしめたいと願っていたと伝えられています。

ですから、いわゆる世捨て人になり、山深い庵に住み、そこで一生を過ごすような過ごし方は、彼はしていません。桜の季節には都を訪ねています。何度も何度も自分が出た家の門を訪ね、灯火のもとで親子が語り合う声も聞いています。まさに「世の中を 背きはてぬと 言ひ置かん 思ひしるべき 人はなくとも」。この歌のとおり行き来し、この世の懐かしさ、うれしさをすべて抱きしめたいという心を持ち続けたのです。

命の盛りと儂さを併せ持つ花

西行の目に見えていたものはこういうものだったと、自分で詠んでいます。「散るを見て 帰る心や桜花 昔にかはる しるしなるらむ」。桜に自分の心を託すのですね。空仁上人という西行をよく知った上人の言葉があります。西行がどういう人生を送ってきたかを十分承知の上で、なおかつなかなか捨てきれない自分の心、そういったものも空仁上人は十分理解していただろうということで、次のような言葉を西行に示したわけです。そのときに西行はハッと気付いたと伝えられています。

『この世の木々は100年、200年と同じ場所に立っている。決して動こうとせず、動きもしない。それでいて、いっぱい花を開く。男と女にしても同じだ。互いに恋し、引かれあっても、決して動くことのできぬ場合がある。それでも花は咲き、花は散る。だが、その花がむなしく散るのを追って行って抱きしめることはない。花が散るゆうべを哀れ、寂しと思うことで、花の盛りがあったことを祝福しているのだ。花が散った後、ここに花が咲いていたのだ。満開のときがあったのだ』、そう思いなさいと空仁上人は西行に伝えたわけです。（辻邦生 「西行花伝」より）

西行の目に見えたのは花の懐かしさ、月のやさしさであるとともに、森羅万象の持つ哀

しさであった。浮き立つ心と沈む心、それを同時に花や月に託して感じ取っていたと言えます。花が散るゆうべを哀れ、寂しと思うことで、花の盛りがあったことを祝福しているという、非常に味わいがある表現ではありませんか。これはもう、桜に託さなければ、あるいは月に託さなければ、すなわち満ちては欠ける月、咲いては散る桜でなければ託せない人の心があると言っていいかと思います。

運命、季節、花。物狂おしいままに、好く心。自然のもの、自分の運命も、季節も、花もすべてを好きになろう。物狂おしいままに好きになろう。まさに魔力と魅力を併せ持ったその心を持ちたい。そういうことで、「花に染む 心のいかに 残りけん 捨て果ててきと 思ふわが身に」と西行は詠んだわけです。しかし、この歌は、そんなに冷静な歌い方ではありません。物狂おしいままにという、本当に人間的な感情をそのまま伝えていると思います。

俗界を出たとは言ってみても、やはりまだ心が定まらない。法勝寺での花の宴、あるいは自分が捨ててきた日常の暮らし、あるいは親しい友人たちとのつながり、そういったものが心のどこかをよぎり、まだ心が定まらない。心の底でつぶやくくらい声がある。それをなかなか捨てきれない。「春風の 花を散らすと 見る夢は 覚めても胸の さわぐなりけり」。非常に不安な心境、捨てきれない、心の中で何か訴えるものがある、それをこの歌に託したわけです。

「身を捨つる 人はまことに 捨つるかは 捨てぬ人こそ 捨つるなりけり」、本当は捨てきれないのだ。だからこそ俗界を捨て、未練を捨てるのだ。しかし、桜が咲くころになると、自分の心の中で、何度も何度もそれでいいのか、これでいいのかとつぶやく声が生まれてくる。それを打ち消すのではなく、またそこから逃げるのでもなく、あるがままに見つめ、揺れ動く心の動きをそのままに歌で表現しようと、西行は考えたといっていいかと思います。

久安 2 年（1146 年）、それでもなお西行は都との関わり、都への未練を捨てようと思いたったのでしょう、遠く隔たった陸奥への旅に出ます。物狂おしいまでに慕わしく思った待賢門院が亡くなり、これで都を去ってもいいと思ったのかも知れませんが、待賢門院没後の翌年の桜のころに旅に出ました。西行は生涯において幾度も決断を下したのですが、その時期はいつも桜に重なります。「この春は 君に別れの 惜しきかな 花のゆくへを 思ひ忘れて」、この歌を残して陸奥への旅に出たわけです。

このとき、待賢門院のお墓のある菩提院の坪庭には、女院を偲ばせる薄紅色の枝垂桜が、

はらはらと舞っていました。愛惜の情を抱いて旅に出る西行、まさに「君に別れの 惜しきかな 花のゆくへを 思い忘れて」と「鈴鹿山 うき世をよそに ふり捨てて いかになりゆく わが身なるらん」に込められているように、揺れ動き、定まらぬ心を歌に託しています。この後どうなっていくのだろうという不安な心を持ち、なおかつ本当に捨て切れるだろうかという愛惜の情を抱いて旅に出て行ったわけです。

それ以後、西行はますます桜にのめり込んでいきます。「散る花も 根にかへりてぞ または咲く 老いこそ果ては 行方しられぬ」、花が散ってもそのいのちは根に戻っていくのだ。根からいのちをもらうからこそ、年々歳々花が咲くのだ。そして、根が健在である限り、花が絶えることはない。花のいのちの儂さと、桜樹の永いいのちを支える根、花は見えても根は見えない、人は花を愛でても根の存在に心に向けることはない、しかし、見えないところにこそつながるいのちの源がある、本質がある、西行はそう言いたかったのでしょうか。まさに、私が桜を育てる心と同じようなことを歌に詠んでいます。そして、気品ある華麗な美しさで桜が咲く満月の夜、その下で西行は望んだとおりに、美に生きた73歳の生涯を閉じたわけです。この時代としては、けっこう長生きだったんですね。

「願はくは 花の下にて 春死なん そのきさらぎの 望月のころ」、あまりにも有名な歌です。この歌のとおり、如月の望月のころにこの世を去ったのです。生前、こういう歌も詠んでいます。「仏には 桜の花を たてまつれ わが後の世を 人とぶらはば」、死んでも桜を供えてください。自分が亡くなった後、「ああ、西行がいたのだ」と言ってくれるのであれば、桜の花をたてまつってくださいと歌に託して後世に伝えたわけです。

私たちはなぜ桜に惹かれるのでしょうか。どこかで、このような西行法師の心に通じた部分を日本人が持っているのだらうと思います。だから日本人の心の中に咲く花は桜となっていくのでしょうか。移ろいを感じる、そこに愛惜の情を感じる、正負相半ばしたものをごく自然に受け止めてきた日本人の「心の風土」があってこそその感じ方だらうと思います。

桜は陶醉する花です。月の光を浴び、白く浮かぶ桜。嵐の庭に散り敷く桜。一斉に開く花々。寒さが花を成熟させ、一気に春を迎える花。憧れる美しさにあふれる花。花追い人、花に憧れ、旅をする。桜に憧れる美しさ。命と儂さを併せ持つ花。危うさの末を感じさせる花。見る人の心と体をろ過する花。さまざまな表現を込め、桜は見るだけでなく陶醉する花だと言っているかと思います。

私が各地で桜の手当てをしているとき、現場を訪れる人から「桜はなぜ美しく咲くのでしょうか」とよく聞かれます。「どういうことをやって桜を美しく咲かせているのですか」

とも尋ねられます。私はいつも「この桜を訪れ、愛でることにより、生きる力を与えられた数え切れない人々の心が宿っているからです。だから、桜は美しく咲くのです」と答えています。まさにそのとおりだと思われる方々も多いかと思えます。

各務原の桜守

その桜を守るのが「桜守」。私自身もそうですが、桜に魅せられたとしか言いようがない仲間たちがいます。冬に新境川の伊吹おろしが吹き付けるところで、ボランティア活動で桜の剪定作業をやる。なぜこんなことをやるのだろうと思って、見ている人もいます。これは、まさに桜に魅せられたとしか言いようがない行為です。

この地、各務原は百十郎桜の地です。ここに桜守がいます。「百十郎桜が弱っている。どうしたらいいでしょうか」と森市長から問いかけられ、私は、「まず、人を育ててください。そこから始めましょう」と答えました。そうすると市長、「どのくらい時間がかかりますか」と返す。私、「5年はかかるでしょう」、市長、「分かりました、やってください」。うちに帰ってよく考えたら、市長は4年に1回選挙がある。5年後にしか結果が出ないものを託すというのは、どういう人だろうと思ったくらいです。

「100年の木は多くの人とともに過ごしてきた。だから、その人たちの心を受け継ぐ人を育てなければ、人の心を桜の体の中に入れ込めない。心がなければ命はよみがえらない。だから、そこにかける人を育ててください」とお願いして、桜講座を始めました。夜の座学から始めていきました。こんな夢物語に大事を託す市長がどれだけいるだろうか。森市長も桜の魔力にとりつかれ、桜の魅力を満喫され、桜の本当の意味を分かっている方だと私は評価しています。

それで始まり、いまだに続いている桜講座です。昼間の調査活動や記録とり、夜の座学、そんなペースで進めてきました。百十郎桜については全部、戸籍謄本をつくっています。その結果を踏まえて現場で診断し、実践作業を行う。しかし、現場実践ばかりやっている、参加者から「勉強もしたい」と要望が出て、桜だけでなく樹木の育て方や、生理・生態に至るまでの学習活動も盛り込んでいます。このように、市民活動でなければならないこと、きめ細かな仕事なので業者に発注したのでは絶対にできない活動を百十郎の桜守たちはやっています。

手を入れた桜と、まだ手が入っていない桜とでは咲き方が全然違います。単にえこひいきで見るのではなく、実際に違います。やはり人の心が込められ、桜がそれに応えてくれ

る。それを実証していると思います。

桜の魅力は、人を引きつける魔力にある。引きつけ方がただものではない。だから他の花ではできない活動が組み立てられるのです。梅守やチューリップ守とかバラ守とか、いないですよ。桜守しかいない。これは、桜が人を引きつける魔力を持っているからとしか言いようがない事実です。

魔力と魅力

北関東・宇都宮の名酒に「四季桜」というお酒があります。私たちは佐藤義清（西行法師）のように、上手に歌は詠めません。あるいは辻邦生のような文章も書けないかもしれません。しかし、桜前線・花便りを求め、その魅力を追いかけて、酒の味と香りに酔う旅を重ねる、これもまた花に魅せられた私たちの魂のあり方であり、桜の魔力のなせる業だろうと思います。他の花を見て飲む酒と桜を見て飲む酒とでは、確かに味が違います。

さて、いろいろとお話し申し上げてきましたが、私が出会った人で宇都宮中央女子高校の校長先生になられた後に退職され、人生を桜とともに過ごされた高松祐一さんからいただいた詩集『桜』の一文を紹介して、私の今日の話の終わりにしたいと思います。

「四季桜」のメーカーに「花しずく」という名前のお酒があります。それに託した一文です。

『「花しずく」を含むと、私は不可思議な陶酔に陥る。幾多の人が丹精を込めて咲かせたこの美しい花のしずくには、北関東の豊かな実りと芳醇な四季の香りがたっぷりと溶け込んでいて、この国に命を受け、かくも得難い巡り合いを授けられた幸せが酒杯から卒然と降り立ってくるからだ』。

見事に花と酒、そこに込められた思い、桜の魔力と魅力を十分に表した文章だと思えます。私はこの文章が好きで、桜の季節にはいつもこの本をひもとき、いただいた高松さんに感謝の念を捧げています。

皆さん、自分の桜風景とともに、桜を見ながらお酒を飲まれるときにこういう感慨を少し持っていたいただけると、もっともっと花も豊かに香りますし、酒の味もうんと薫り高く芳醇に心に染み入っていくだろうと思います。花の季節に飲む酒は、他の季節に飲む酒とは全く違う。その中で、どこかにつながっているかもしれない皆さん方の心と西行の心、それをつなぐ桜の存在について、あらためて考えていただければと思います。

私なりの桜に対する思いを語らせていただきました。また新境川の桜の手入れを継続し

てやっていくことになろうかと思えます。だんだんと参加者が高齢化しています。新しいメンバーを募集しているので、市役所の交流課に申し出ていただければと思います。

参加者は「年とったので」と言うけれども、「人間は年とったと思ったときに年をとるのだ。年とってないと思え。桜を見る。100年も生きているのだぞ。まだまだだ」と言っています。桜とともに人生を過ごすことが生涯、心も体も健康に常に再生させる、みなぎる力を桜から得られることにつながるのだと信じます。

百十郎桜にかかわる機会を与えていただきました森市長に心より感謝を申し上げます。本日はご清聴賜り、まことにありがとうございました。（拍手）

【サミット全体会議】

コーディネーター： 篠田伸夫 氏（前全国町村議会議長会事務総長）

パネリスト： 斉藤滋一 氏（北海道新ひだか町 経済部長）

富岡 明 氏（秋田県仙北市 文化財課長）

道給昌子 氏（東京都北区 観光振興担当副参事）

伊藤勝美 氏（新潟県五泉市 市長）

松尾 修 氏（長野県伊那市 建設部長）

國島芳明 氏（岐阜県高山市 市長）

青木一也 氏（岐阜県本巣市 副市長）

森 真 氏（岐阜県各務原市 市長）

岡田和明 氏（愛知県犬山市 副市長）

山本茂之 氏（奈良県吉野町 観光参事）

宮地昭範 氏（岡山県津山市 市長）

木村守登 氏（島根県雲南市 産業振興部長）

吉野 哲 氏（長崎県大村市 副市長）

郷 啓蔵 氏（熊本県水上村 企画観光課長）

篠田 皆さん、おはようございます。コーディネーターの篠田です。全国さくらサミットは、今回めでたく第 20 回目ということで大変切れ目のいい年を迎えたわけです。第 1 回目が行われたのが、昭和 63 年でした。昭和 63 年というのは昭和の最後の年でした。したがって、満で数えますと、平成の時代とともにこのさくらサミットというのは年を過ぎていくわけですし、もう 24 年経過したことになります。1980 年代には自治体サミットというのがいろいろなところで誕生いたしました。しかし残念ながら、平成の大合併があったりして、この全国さくらサミットのように今日まで続いているサミットはたぶんないのではないかと思います。これは本当に自慢していい話だと思いますし、このサミットに懸ける各首長さん方の熱意といいますか、愛情がそうさせたのではないかと思います。

昭和 63 年に開かれた第 1 回は島根県の旧木次町、今日お越しの雲南市で開催されました。どうして島根県で開催されたのかと不思議に思われるかもしれませんが、実は当時、全国総合開発計画（四全総）が政府によって策定されました。昭和 62 年 6 月のことです。

が、その計画の中に、「交流ネットワーク構想」というものが基本目標として掲げられていました。いまでもそうなのですが、当時、東京一極集中がひどくて、それをストップしなければいけないということからこの構想が打ち出されたわけです。交流を通して地域を活性化しようという考え方です。当時の内閣総理大臣は竹下さんでした。竹下さんは実はお生まれが島根県。当時、日本の経済は大変豊かでして、各市町村に何に使ってもいいよということで、「ふるさと創生資金」として1億円をポンッとくれたわけです。その1億円を使って金塊を買ったようなところもありましたが、そういう時代でした。「地方の皆さん、元気を出しましょうよ」というふうな時代背景があったから、恐らく木次町は、あえてさくらサミットを呼び掛けられたのではないかと思っています。後ほど、雲南市のほうから発表がありますが、斐伊川堤防に2キロの桜並木が植わっていることで大変有名であります。

全体会議に入るわけですが、今回のテーマは2つ。「桜による都市ビジョン」と「ボランティアと連携する桜」です。これからのサミットの進め方についてご説明申し上げたいと思います。各自治体の皆さん方から3分以内でご発表をいただきます。2つのテーマについて3分以内ですからかなりしんどいかもかもしれませんが、全体の使える時間が100分程度です。そういうことなので、ぜひとも「3分以内」を厳守していただき、できるだけディスカッションの時間を取りたいと思っています。

昨日の事前会議でも私は、皆さん方にこの「3分以内」ということを口酸っぱく申し上げました。ご協力をお願いしたいと思っています。全体会議の終了時刻は12時10分を予定しています。

それでは、北から順にご発表をいただきたいと思います。まず最北端、新ひだか町さん、よろしく申し上げます。

事例報告 「桜による都市ビジョン」と「ボランティアと連携する桜」

齊藤（新ひだか町） ただいまご紹介にあずかりました、北海道は新ひだか町です。わが町新ひだか町は、平成18年3月31日に旧静内町と旧三石町とが合併して誕生した町です。北海道の南西部、馬産地・日高地方の中央に位置し、日高山脈を背に雄大な太平洋をのぞみ、夏は涼しく雪の少ない涼夏少雪の郷です。日高地方の中核都市でもあります。「風がおる 優駿桜国 新ひだか」。優駿とは馬のことを指しています。「桜国」と書いて「お

うこく」と読んでいただきたいと思います。馬と桜を基本にまちづくりを進めているところ
です。

新ひだか町の象徴でもある二十間道路桜並木。当時、宮内庁所管の新冠御料牧場を視察
する皇族方の行啓道路として、幅 20 間、延長約 8 キロの雄大な道路をつくり、その道路
の両縁に近隣の山から 3 年かけて桜を移植したのが始まりです。直線 7 キロにわたって約
3000 本の桜が一斉に咲き誇る壮大なスケールは日本屈指であり、日本の道百選、日本さく
ら名所百選、北海道遺産、平成 21 年には花の観光地づくり大賞に選定されるなど、数多
くの栄誉をいただいています。しかし、この並木の桜のほとんどが樹齢 100 年前後の高齢
樹であることから、回復と延命治療が現在の最大の課題となっています。

この桜の診断については平成 9 年より、北海道七飯町在住の桜研究者であり、日本さく
らの会認定の桜守である浅利先生を招聘し、その維持・管理・延命等の方法をご教示いた
だき、多くの町民ボランティアが参加し、浅利氏指導の下、保存活動を進めているところ
です。また近年においては、各種交付金や単独事業として、新規植栽、病気木の治療を行
い、この先人の残した偉大な遺産である桜を守り育て、次世代へ引き継げるようなさまざ
まな活動を展開しているところです。

この二十間の桜はこれから 1 カ月後には満開になると思います。どうぞよろしくお願
いいたします。（拍手）

篠田 ありがとうございます。それでは仙北市さん、お願いします。

富岡（仙北市） 秋田県仙北市です。仙北市と言ってもピンとこない方がおられるかと思
います。秋田県の角館というところが合併して仙北市になりました。その角館地区には 3
つの桜があります。1 つは昭和初期に植栽された、檜木内川堤の 2 キロにわたる桜のトン
ネル。ソメイヨシノです。もう 1 つは、重要伝統的建造物群武家屋敷の中にある天然記念
物のシダレザクラ。もう 1 つが武士の内職として始まりましたヤマザクラの樹皮を使った
樺細工という伝統工芸品。この 3 つが仙北市の桜です。ほかの自治体さんはもう 100 年ぐ
らいということですが、うちのほうも江戸の中期から桜というものに対して非常に共感を
している。林先生は陶醉ということも言っておられますが、観賞、陶醉、そのほかに生業、
いわゆる工芸品があるので、角館の中には桜というものに対して非常に関心があり、本当
に都市づくりの中での根源という感じがしています。私は文化財課なのですが、いまでも

「ちょっと邪魔になるから桜を切ってもいいですか」と電話が来ることがあります。そのような感じで市民の方々は桜を守っており、言えば桜中心の感じでまちづくりが進められています。

もう1つのボランティア関係です。うちのほうではあまりボランティアは育てていませんんで行政主導になるのですが、桜祭り期間前のクリーンアップ、河川敷、武家屋敷群の清掃活動です。いま映っているのは、角館小学校の4年生が、「桜のまちの案内人」として桜祭り期間中、押し付けで観光客に観光ボランティアをやっているところです。もう1つは、角館中学校の2年生が、5月の終わりごろ、花が散って葉が出たあとに施肥、いわゆるお礼肥えをしています。これは桜を大事にする心とおもてなしの心を育むということなので、児童・生徒によって長年行ってきています。

以上です。（拍手）

篠田 ありがとうございます。それでは引き続き、東京都は北区さん、お願いします。

道給（北区） おはようございます。東京都の北区です。桜の北区と言えば、JR 王子駅に隣接した飛鳥山公園です。ここは江戸幕府、八代将軍徳川吉宗が、庶民の行楽地にするため1270本の桜を植えたところです。この飛鳥山公園は、鎌倉時代末期、この地の豪族豊島氏の熊野権現信仰から、紀州・熊野の飛鳥明神を雑木林に祀り飛鳥山にしました。また、若一王子社を勧請し、王子神社にしたところです。江戸時代、飛鳥山は将軍が日光東照宮に参詣するための御成道に面した雑木林で、飛鳥山を含む広範なエリアは幕府の天領となっており、将軍がしばしば鷹狩りに来ていました。そのような折り、吉宗は飛鳥山という地名が故郷の紀州にゆかりがあることを知り、桜を植えるきっかけになったということです。

将軍吉宗の当時は桜の名所で宴会をするというのはタブーであったのですが、吉宗の時代に、この飛鳥山の地でお酒を飲んだり仮装をしたりということが許されたことから、庶民にはかなり好評だったと言われています。

飛鳥山がある王子地区は、明治以降は近代洋紙産業発祥の地として栄えました。皆さまご存知の実業家・渋沢栄一は、飛鳥山の裾野を流れる石神井川の水量が豊かであることに着目し、後の王子製紙となる製紙会社を設立いたしました。その後、王子地区には多くの工場が並び立ち工業都市として栄えましたが、そのような状況の中でも飛鳥山の桜は生き

残ったということです。

また、「北区活性化ビジョン行動計画」では、この飛鳥山や日光御成道等の魅力を発掘し、産業団体と連携してまちづくりを行い、情報発信をしていこうとしています。現在では第 10 回さくらサミットを開催させていただいたことを契機に、飛鳥山公園で区民の皆さまにより「さくら SA * KASO 祭り」を開催していただいています。

あとは区民の健康づくりの取り組みの 1 つとして、石神井川の桜を巡る 6.5 キロの桜ウォークもあります。区民のウォーキングの会の方たちが中心として区と協働で開催しており、先週の日曜日には、桜は蕾の状態でしたが、2237 人の方のご参加をいただいて開催したところです。また、北区は観光ボランティアというような方たちも多くおられて、申し込みに応じていろいろなご案内をするという形で、区民の方たちのお力をもって観光振興に取り組んでいるところです。

ありがとうございました。（拍手）

篠田 ありがとうございました。引き続き新潟県の五泉市さん、お願いします。

伊藤（五泉市） おはようございます。新潟県五泉市市長の伊藤です。よろしくお願ひしたいと思います。

「五つの泉」と書いて「ごせん」と読みます。新潟市から 40 分ぐらいのところに位置しており、平成 18 年に旧五泉市と旧村松町の 1 市 1 町が合併し、そのどちらにも桜があります。いまスクリーンに出ているのは村松公園です。この村松公園は愛宕山周辺 39 ヘクタールのところです。愛宕山と申しましても 100 メートルぐらいの山ですが、日清戦争で陸軍の歩兵三十連隊が設置され、その後、日露戦争の戦勝記念公園として桜 3000 本が植えられたということです。戦勝記念公園なので、忠霊塔があり忠魂碑がありという環境の中に桜が咲き誇っています。太平洋戦争においても日本に 2 つの少年通信兵学校が設置され、昭和 18 年から 3 年間、15 歳、16 歳の 2400 名の子どもたちが、国を思い、家族を思い、地域を思い、全国各地から入学するという、そういった軍都でした。これは村松地区です。

五泉地区においては、小山田（菅名岳）という、1000 メートルぐらいの山があります。ここには小山田のヒガンザクラ。これは国の天然記念物になっており、20 日間ぐらい裾野から順次咲き始めます。吉野の山にはちょっと見劣りはしますが、小山田のヒガンザクラ

として、2つの市、町が桜を愛でているところです。ここには穂先八重彼岸桜という、これもまたかれんな花を咲かせる木があります。これも1つ注目の木で、今日またここでご紹介できることを大変喜んでいるところです。本当にかれんな木であり、樹勢も弱っていますが、再度花を開かせているという現在です。

五泉市においては、いま雪が解け、3万株のミズバショウと、桜の村松公園においてはこれからユキワリソウが桜の木の下に咲きます。また、150万株のチューリップの花畑が一面にあり、チューリップが終わりますと、五泉市にちなんで5000株の120種のボタンが咲き誇ります。4月から5月の半ばごろまで、花シリーズということで市民の皆さん、また愛でています。

よろしく申し上げます。ありがとうございました。（拍手）

篠田 ありがとうございました。それでは次に、長野県の伊那市さん、お願いします。

松尾（伊那市） おはようございます。長野県は南部に位置します伊那市です。当市は平成18年に旧伊那市、高遠町、長谷村の3市町村が合併して新伊那市として誕生しています。

旧高遠町には、天下第一の桜と称している、高遠城址公園のタカトオコヒガンザクラの樹林があります。この樹林は長野県の天然記念物にも指定されています。旧高遠町では「高遠町桜憲章」を定めて桜の保護・育成に努め、桜からのまちづくりを進めていました。合併後の新市においても、旧高遠町が進めてきた桜からのまちづくりを継承して市内に数多くある桜の名所を活用し、「桜を愛し、育み、親しむ桜の里」を目標に掲げ、市民と行政とが力を合わせて取り組んでいく「日本一の桜の里づくり」計画を平成22年度に策定いたしました。

「日本一の桜の里づくり」計画を進める主役はもちろん市民です。市民が自発的に取り組んだ代表的な活動の事例としては、三峰川堤防桜並木づくりがあります。高遠城址公園の山裾を流れる三峰川という、比較的大きな河川がありますが、この川が流れ下って市内の中心部で本川である天竜川と合流します。市の中心部から高遠城址までを桜並木でつなごうではないか。それを目標に三峰川沿川の住民がそれぞれの地区ごとに桜を植樹し、そして管理し、桜並木をつくり上げています。すでに約2キロメートルほどが完成しています。

写真は、桜守さんたちが冬場の桜並木の手入れをしている絵です。このように市民と行政とが目標・目的を明確にし、協働で活動することにより、現在、市内に1万2000本を数えられている桜がさらに増え、それをまた守り育てる市民、桜守も増えて、伊那市の桜が名実ともに天下第一の桜となるよう、取り組んでいきたいと考えています。

以上です。（拍手）

篠田 ありがとうございます。それでは岐阜県は高山市さん、お願いします。

國島（高山市） おはようございます。今年からさくらサミットに参加させていただきました高山市です。よろしく願いいたします。

まず、高山市の都市ビジョンからお話しさせていただきます。高山市は平成17年に合併し、日本一広い都市となりました。ユニバーサルデザインに配慮した施設整備や東海北陸自動車道の全線開通。さらには『ミシュラン』で最高評価の三つ星をいただくなど積極的な誘客活動により、観光を目指す都市として進んでいるところです。

総合計画の中では、この国際観光都市という魅力をさらに向上させ、そして地域の資源を活用すると同時にいろいろなところと連携し、個性ある観光の地としてその主要施策を位置付け、四季を通じてさまざまな取り組みを行ってきているところです。

桜に関しては、広大な面積と起伏に富んだ地形を持つ高山市であるので、4月の中旬から5月上旬にかけ、長い期間にわたっていろいろな場所でさまざまな桜を楽しむことから、桜の開花時期に合わせて川沿いに植栽された桜並木のライトアップなど、その地域の特色に合わせ市内各地でいろいろなイベントをさせていただいているところです。

また、地域が有する資源や特性を有効に活用するという意味で、それぞれの地域において特色あるまちづくりということを総合計画に位置付けています。今ここに写真が出ている臥龍桜は一之宮地域ですが、1100年の歴史を持っています。これら臥龍桜を有する地域では「桜が舞う地域づくり」というようなテーマにしています。さらには、岐阜県の天然記念物になっている荘川地域における荘川桜は、ダムの底に沈もうとしていた桜を引き揚げ、500年くらいたっています。こういう荘川桜をシンボルとした桜の地域づくりということも地域で進めていますが、銘木の保存・活用だけではなく、二世桜を実生から育てていくというような活動もしているところです。

次に、ボランティアの関係です。こういういろいろな桜を守るにはやはり市民の皆さん

のお力が大事です。そういう意味でいろいろな地域においてそれぞれ桜を守る会をつくっていただき、守る会で剪定や消毒、あるいは施肥をしていただいています。そのような中で皆さん方とともに桜を守り、次の世代に引き継いでいこうと思っているところです。(拍手)

篠田 ありがとうございます。それでは岐阜県は本巣市さん、お願いします。

青木(本巣市) 岐阜県の本巣市です。本巣市は各務原市さんとは岐阜市を挟んでお隣ということでお出でになった方も多いかと思いますが、根尾地域に樹齢 1500 年、第 26 代継体天皇がお手植えされたと言われる淡墨桜があります。

この淡墨桜を活用した都市ビジョンについては、本巣市は、平成 16 年 2 月に根尾村を含めた 4 町村が合併してできた市ですが、旧根尾村時代からこの桜を活用したまちづくりが行われています。先ほど篠田コーディネーターからもふるさと創生事業という話がありましたが、こちらを活用して温泉を掘り、平成 7 年から 9 年にかけて温泉施設「うすずみ温泉四季彩館」を整備のうえ運営してきたところであり、現在、本巣市も引き継いで運営しています。この温泉では、地元の方が撮られた淡墨桜の写真とか、あるいは地元根尾小学校の児童が描いた淡墨桜の絵などを定期的に掲示もして、また違った角度で淡墨桜を楽しんでいただいているところです。

また、淡墨桜がある淡墨公園において、「うすずみサマーフェスティバル」ということで平成 5 年度より毎年 8 月に、世界的に有名なオカリナ奏者である宗次郎さんのオカリナコンサートを開催しています。毎年 2000 人ほどのお客さまが全国から来られており、リピーターのお客さまも大変多くございます。夏の夜の根尾谷に響きわたるオカリナの音色が大変幻想的で美しいものがあります。毎年 8 月に開催していますので、ぜひお越しいただきたいと思います。

現在、淡墨桜の保存・保護のため公園の再整備を行っています。その中でこれからライトアップをしていこうということで昨年度施設の整備をいたし、今年の 4 月より実施する予定です。時期は三分咲きから始めたいと思っていますので、恐らく今週の木曜日か金曜日あたりからできるかと思っています。また市のホームページやマスコミにもアナウンスをさせていただきますので、そういった情報に留意してぜひお越しいただきたいと思います。

また、いま写真に映っていますが、桜シーズンにおいては地元根尾中学校の全校生徒に

よるボランティアが行われています。大変小さい学校で昨年度の全校生徒数は 37 人ですが、桜シーズン中に観光客を対象にオカリナ演奏と観光案内を行っています。これは総合学習の時間を活用した「桜学習」として実施しているもので、多くの観光客の方から好評をいただいています。この根尾中学校の生徒は、先ほどご紹介した宗次郎コンサートでも宗次郎さんとオカリナ演奏の共演をさせていただいています。

もう 1 つ、本巢市の観光協会で「語り部の会」という組織を設置しております。桜シーズンにおける観光客に対して桜ガイドをさせていただいており、これも観光客に大変好評をいただいています。なお、今年の桜の見ごろは今週末から来週にかけて迎えるかと思えます。近いところなのでまたぜひお越しいただきたいと思えます。

ありがとうございました。（拍手）

篠田 ありがとうございました。それでは愛知県は犬山市さん、お願いします。

岡田（犬山市） おはようございます。犬山市の副市長の岡田と申します。各務原市さんはすぐお隣なので場所は省略させていただきますが、各務原市とは、歴史、文化、自然を生かしたまちづくりをしていこうという「まちづくり盟約」を結んでいる関係があります。そしてまた、今日講演をいただきました林先生は犬山にお住まいということで、先生には環境審議会の会長や文化財保護審議会をお願いしていますし、個人的には私の大学時代の恩師でもあります。そんな関係もあり、今回、サミットにお誘いいただけたのではないかと考えています。新参加者ですが、よろしくお願ひしたいと思ひます。

犬山は、昨日、一昨日と第 378 回の犬山祭が開催されました。これは国の重要無形民俗文化財として、桜のトンネルの中を 13 両の車山（やま）が練り歩くということで、ご覧になった方も多いいと思ひます。また、ホールでも展示しているポスターは、桜に浮かぶ国宝犬山城と国宝茶室如庵。犬山の歴史資産と桜は切っても切り離せないものです。ただ、市民の中には、それが当たり前の風景になってしまい、新しく桜を使ってまちづくりをしていこうという認識がちょっとないのではないかといいところもあひます。

市としては意図的にいま、「さくらねっと・うおーく構想」を練り広げています。この目的は 3 つあり、1 つは、いま言ひました歴史資産をネットワークで結び付けていこう。それと犬山にはもう 1 つ、里山文化、また里山自然ということで、まだまだいいものが残されています。田園風景であつたり、湿地であつたり、ため池であつたり、残していき

い自然があるわけで、そういうところも「さくらねっと・うぉーく」でつないでいきたい。

そしてもう1つは、健康な市民をつくるという観点から、歩行者が安心して歩けるようなネットワークということで、いまさくらネットワークを構想して進めようとしているところです。その中で市民の方に一人一役、何かを担っていただけるといいなということで、これからまたボランティアなどそれぞれの参画の仕方も研究していきたいと思っています。今日はこういうサミットを通じ、また皆さんの事例をお聞きしながら進めていきたいと思っています。

お近くですし、またいま桜もきれいな時期なので、犬山のほうにもぜひお越しいただきたいと思います。（拍手）

篠田 ありがとうございます。それでは、次に奈良県吉野町さん、お願いします。

山本（吉野町） おはようございます。奈良県の吉野町です。奈良県の中央部に位置しています。皆さま、吉野には来られた方もいらっしゃるかと思いますが、今から1300年前、修験道の開祖である役行者が蔵王権現を感得したとき、そばにあった桜の木でその権現像を彫ったというのがそもそも桜の始まりで、修験道がどんどん盛んになるにつれてこれがご神木として崇められ、献木の形にされてきたわけです。江戸の中期には大阪の豪商の末吉勘兵衛が1万本の桜を寄贈したという記録も残っていますし、日露戦争の戦勝記念にも桜を植えられたということで、現在、54ヘクタールの中に約3万本の桜がありますが、その9割以上が山桜です。いまご覧いただいているのは上千本のほうから中千本を見た景色で、この景色がやはり一番いい景色だと思っています。

その中で吉野町は、桜が第一の売り物ということもあり、昨年度から「桜の町構想」ということで、既存の資料の収集や町内の桜の現況調査を始めました。それと、桜は傷んできているので、航空機からのリモートセンシングといって、レーダーによって桜の状況を知ろうということで、現在、行っています。それをもとに桜樹林の管理・育成ガイドラインや人材育成計画のガイドラインの策定をしていこうと思っています。

また、桜の学校ということで、これも昨年度から、吉野山の桜に関わる各種団体の目標や行動計画をお互いに確認し合い、相互の連携や情報の交換を行うということと、各種構成団体が従前実施した吉野山の桜に関する調査結果などの共有化を図っていこうということをしています。それから、町で得られた調査データの集積、あるいは桜に関する都市な

どの集積を行っていきたいと考えています。

また、地元の小中学生は、桜の時期になかなか桜の満開を見ていないわけです。それが吉野から育っていったときに、「吉野の自慢は何ですか」「吉野の桜です」「吉野の桜はどんなのですか」と言われたときに答えられないということもありますので、新学期で大変忙しい時期ですが、子どもたちに満開の桜を見せよう。これも昨年から始めています。

それから、桜の保護。いま大変危機を迎えています。京都大学大学院の森本教授をはじめとして吉野山の桜の調査チームを結成し、3年間調査をやっていただき、ようやくこの春に結果が出ることになっています。その資金を集めるのが大変でした。町費だけではなかなかいきませんので、CSR活動という形で企業さんからご尽力をいただきました。例えば大和ハウスさん。イオンさんはWAONカードの収益の一部、南都銀行さんもさくら定期の収益の一部。あるいは読売新聞さんにもご協力いただき、いま活動をしています。

ありがとうございました。（拍手）

篠田 ありがとうございます。続いて島根県雲南市さん、お願いします。

木村（雲南市） こんにちは。島根県雲南市です。先ほど紹介がありましたように、63年に第1回目のサミットが行われてから20年あまりということ。そのときの桜が貧弱だったという反省から、20年の間に桜の管理をしてきて、ようやく全国に誇れる桜になったというところ。いま写真に映っているのは斐伊川沿いの2キロにわたる桜並木で、ここが一番見どころです。木次町というところが中心部で、約5万本と言われていますが、誰も数えたことがないので分かりません。多い人は10万本と言っていますが、何十年後にその花が咲くことになりますと壮大なものになります。

都市ビジョンの関係ですが、特に桜を中心とした地域づくりをやっていくということで木次町が唱えられてきました。そのことが今は開いているのかなという感じがしており、例えば演劇をやるとか、いわゆる桜という冠を付けたスポーツ交流とか、あるいは川があるので、お花見レガッタというようなものも開催しています。それから太鼓もあり、太鼓の演奏やグループができています。また食品も、うどん、赤飯、お茶、餅などもつくっており、まさに桜漬けの雲南市ということになっています。

ボランティアの関係です。雲南市の場合は「さくらの会」という会をつくっており、600名の会員を数えています。いま目標としては1000人と思っています。今日は吾郷会長も

来ておられるわけですが、この会を中心に桜の面倒を見ていくということです。

今日は皆さん方にご紹介ですが、お手元にある『さくら、良き友よ』という本が発刊されました。いま管理をしてもらっている桜守の方は4代目です。いま2人が活躍しているようですが、その2代目の方が執筆されたものです。いろいろな活動の足跡をたどったものを書き上げており、小学校、中学校の副読本にも使っていきたいと思っています。こうした活動の状況があります。お買い求めいただければと思いますが、市役所のほうで紹介をしているので、よろしくお願ひしたいと思っています。今日は私ネクタイをしています。これは桜染めです。ネクタイ、ネックチーフ、ワイシャツ、それから、吾郷会長の奥さまが染めておられるスカーフもやっているの、雲南市に来られたらぜひともこれをお求めいただきたいということです（笑）。

以上です。（拍手）

篠田 ありがとうございます。ちなみにそれは、ツバキで染めたのですか。

木村（雲南市） いや、桜の木の皮ですか。花びらだけではないということです。

篠田 分かりました。それでは岡山県津山市さん、お願いします。

宮地（津山市） 皆さま、こんにちは。岡山県津山市長の宮地昭範です。津山市は桜と歴史遺産、そして文化の町です。その中でも津山城（鶴山公園）は現在、岡山県内で唯一「日本さくら名所100選」で選ばれ、津山市の中心に位置する津山のシンボルです。また、高さ45メートルに及ぶ石垣と平成17年に復元された備中櫓、そして約1000本の桜が満開を迎える姿はまさに壮観です。観光のシンボルである津山城については平成10年3月に史跡津山城跡保存整備計画を定め、長期的視野で、景観整備並びに観光資源としての価値維持・向上に努めているところです。このように津山市においては、観光の資源としてはもちろん、市民の憩いの象徴として桜の事業を推進していきたいと考えているところです。

また、津山市の多くの観光施設で市民ボランティアが活動をしています。特に、津山城で開催される津山さくらまつり期間中に活動するお城山クリーンボランティアは、平成12年から活動を始め、現在、祭り期間中のゴミの量が当初の4分の1に減量するまでに至っています。昨今、津山市観光協会の呼び掛けで津山城の桜の植樹、あるいは景観整備のた

めのさくら基金を創設しました。そこには多くの市民団体からの桜への思いが寄せられています。津山市の花でもある桜は、行政だけではなく、多くの市民、そして観光客の手によって、大切に後世へ受け継がれています。実は私は8人の孫がいます。8人とも全員男の子ですが、桜の花にちなんだ名の孫がおり、娘は非常にいい名前を付けたな。このようにも思っているところです。

以上です。ありがとうございました。（拍手）

篠田 ありがとうございました。次に長崎県の大村市さん、どうぞ。

吉野（大村市） 大村市の副市長をしている吉野と申します。あまりご存知ない方が多いかと思いますが、大村市は長崎県のほぼ中央に位置し、長崎空港があるまちです。長崎空港と高速道路のインターチェンジ、それと10年後には新幹線の駅もできるということで、その3つがそろった都市は全国でもなかなか珍しいところです。

大村市のまちづくりについては、基本的に「花と歴史」が常に付いて回ります。いま我々の第5次総合計画も「花と歴史につつまれた未来に羽ばたく産業・交流都市」であり、市長が申しましたキャッチフレーズ、「花と歴史と技術のまち大村」ということで進めています。花というと、大村市の場合、桜もその中心ではありますが、桜が3月から4月にかけて、それとシャクナゲが5月ごろ。シャクナゲも世界のシャクナゲが約45種類、5800本ほどあります。

5月の終わりから6月にかけては、大村公園というところにハナショウブが約10万株の30万本ぐらい。これは西日本でも有数なハナショウブです。そういった一連の中で、大村市としては花という部分に取り組んでいるところです。今年度は市制施行70周年です。その中でも特に花をテーマにしますが、さらに市長はバラ園をつくるとか、いろいろな構想を持っています。年間を通じて花で埋め尽くしたいということです。

その中でも核になるのはやはり桜です。特に桜の中でも大村市で発見されたオオムラザクラ。これは花びらが60~200枚程度ある八重桜の一種で国の天然記念物ですが、その桜を中心に行っています。また、国交省にもお願いをし、国道等にも街路樹として桜をずっと植えていってもらっています。それらについては市民の方々にいわゆるマイツリー登録をしていただき、それぞれネームプレートを添付して管理していただいています。また桜については、ある地域では地域の方々が自分たちで1000本程度の桜を植樹したりという

ことで、いま市内には約 1 万 3000 本程度ありますが、これを 1 万 4000 本、1 万 5000 本として、市民一体となって桜のまちをつかっていきたいと考えています。

以上です。（拍手）

篠田 ありがとうございます。それでは熊本県は水上村さん、お願いします。

郷（水上村） こんにちは。熊本県の水上村です。水上村は九州の中央部の熊本県内でもさらに東南のほうで、九州中央山地国定公園内の山深い村です。人口は 2500 人ぐらいで大変小さな村です。面積は 190 平方メートルありますが、ほとんどの 9 割が山です。人口の 10 倍以上、約 3 万頭のシカがいるということで、夜、道を走っていても、車には会わないけれどもシカにはよく会う。そのようなイメージを持っていただければと思います。また、最上川や富士川と並び、日本三大急流の 1 つの球磨川の源流を有する村でもありません。

この球磨川に昭和 35 年にダムができ、村の中心部に広大な湖ができました。

これを契機に、だれが言い出したのか分かりませんが、村の方々がみんなで 1 万本の桜を湖畔の周囲 14 キロに植栽されました。これが 10 年たち、20 年たち、県内でも湖畔に映る桜の名所として大変有名になりました。

その後、28 年ぐらい前ですか、昭和 59 年、後の総理大臣をされました当時の細川護熙熊本県知事が「熊本日本一づくり運動」を提唱されました。当時、地域活性化とか地域づくりというようなことが盛んに行われており、わが村も何かやろうということで、「日本一の桜の里づくり」に取り組みました。桜に関していろいろなことに取り組みました。各家々の「軒先 1 本植栽運動」や湖畔周囲の桜の除草刈りや清掃。また桜にはテング巣病という病気がありますので、これの防除。こういったことも住民一人ひとりが参加してやってまいりました。また、ダム湖畔に 80 メートルの高さの噴水も設置しました。これは先ほど篠田先生からありました、ふるさと創生資金によるものです。

この他にも桜図鑑園があります。全国に約 350 種類ほど桜の種類があると言われていています。このうちの 100 種類を集め、約 1 ヘクタールの図鑑園に植栽しています。ここは春、夏、秋、冬と、開花の時期も違うし、色や形も違う、いろいろな花が咲いているところがございます。

イベントとしましては、つい先週、4 月 1 日に第 41 回の桜祭りを開催したところです。

天候と満開の時期とがばっちり合い、大変な人出で、水上村では本当に年に一度の 10 キロに及ぶ大渋滞が発生するほどの賑わいでした。このときにはシカもみんな山に逃げていました（笑）。そのようなところです。

最後に、水上村は平成 22 年に熊本県では初となる森林セラピー基地にも認定をいただきましたので、この中でも桜を生かしながら、今後の村づくりを進めていきたいと考えています。ありがとうございました。（拍手）

篠田 ありがとうございました。それでは、最後に各務原市さんです。よろしく願います。

森（各務原市） 各務原市の都市ビジョンは「公園都市」です。それはずっと前からで、地図をご覧になると、北部に里山群、南部に木曾川、その間を新境川、大安寺川があり、人間が住むほぼベストの地形をしているところに目をつけ、「公園都市」が都市ビジョンです。さらに数年前から「桜回廊都市づくり」をやっています。これはスケールの大きいもので、東西に細長い市域をぐるっと桜並木で結ぶという構想です。総延長は 39 キロメートルです。約 400 本の成長木を当市にご縁のある団体から寄付していただき、地域住民約 400 人の方にお集まりいただいて毎年 2 月に植樹しています。これがその光景です。総延長 39 キロメートルの全部の完成は平成 26 年度を予定しており、楽しみであります。これが「桜回廊都市計画」です。

各務原市の政策は桜だけではなく、パークレンジャーというのを持っており、市民ボランティアでやっていただくということです。映っているのは桜百十郎桜保全ボランティアで、桜の手入れを市民の熱意のある方をお願いしてやっている光景です。

調べたことがあるのですが、日ごろ我々の食べている食物は、お米にしる、野菜物にしる、みかんをはじめとする果物にしる、もともとの原種はほとんどが外来産です。ところが、桜だけは文字どおりメイド・イン・ジャパンです。したがって、桜を非常に大事にしているということです。いっぱい桜でグルッと囲ったまちができることを楽しみにしています。

イベントとしては、ちょうど今から 1 週間前の土日が桜祭りでした。今年は開花が遅うございましたが、それでもたくさんの市民の皆さんがお出でになりました。この桜祭りには 20 万人から 30 万人、関西方面からもバスで観に来てくださいます。また今週の土日、

フードフェスティバルというのをやりました。これがビッグイベントです。これは新境川の桜でご覧いただいたとおりですが、戦前に市川百十郎という歌舞伎役者がボランティアで植えられた。ところが、戦争でずいぶん切ったり枯れたりして、戦後いち早く、当時の合併前の那加町の町長の音頭取りで町民の方が植樹した。それが新境川の桜堤です。それが市域にグルッと回るといふことで、各務原市の基本的な政策の大きな1つになっています。

以上です。（拍手）

桜によるまちづくりの「きっかけ」の3つのタイプ

篠田 ありがとうございます。

ひとりごと発表をいただきました。これからディスカッションに入るわけですが、今日は14団体がお越しです。先ほどからご紹介がありましたように、日本さくらの会が「さくら名所百選」として、日本の本当に素晴らしいところを100選んでいます。14団体中11団体が実は「さくら名所百選」に選ばれています。そういう点では本当に日本の中で代表的な桜の名所の自治体がお集まりになっており、こんな素晴らしいサミットはないのではないかと考えています。

ディスカッションに移る前にこんな整理をしてみたらどうかと思い、勝手な整理をさせてもらいました。桜によるまちづくりを真剣におやりになっているわけですが、何を1つの礎にして桜によるまちづくりをやっていらっしゃるのか、先ほど14団体のお話を聞いて、大きく2つのタイプに分かれるのではないかと考えました。

1つは、先人があることをきっかけに桜を植えていった。その結果、立派な桜並木や公園がつくられてきた。それを財産として桜によるまちづくりを現在、営々としてやっていらっしゃるというタイプ。これをAタイプとします。

もう1つは、根尾の淡墨桜に代表されますが、そういう文化財として由緒ある桜がある。それは1本の桜であったり群落であったりするわけですが、その存在を財産として桜によるまちづくりを営々とやっていらっしゃる。これをBタイプとします。この14団体は大体その2つに分かれるのではないかと考えます。

ただ、仙北市さんのように、武家屋敷の文化財としての桜を持つ反面、檜木内川沿いの堤防の桜がある。これは今の天皇陛下の誕生を記念して桜並木をつくったということで、仙北市さんなどはAタイプとBタイプを兼ね備えていらっしゃる。こんなふうになるわけ

ですが、大体この A、B で分類できるかと思います。A タイプは「あることをきっかけに」と私はあえて申しましたが、今日の発表の中でももう少しそのきっかけの部分聞いてみたい自治体があります。

まず、伊那市さんです。高遠城址の公園は 1500 本ですか、すばらしい桜で、日本の桜三大名所の 1 つだと言われていたのですが、あんな立派な桜が何をきっかけで植樹されたのか。そのきっかけを詳しく教えていただきたいと思うので、よろしくお願いします。

松尾（伊那市） 高遠城址の桜は、明治維新の後、明治 4 年に廃藩置県が出されます。そして翌 5 年には高遠藩の高遠城が取り壊される。お城がなくなったということで、藩士もそうですが、城下の住民も心の拠り所がなくなったわけです。山城であった石垣だけが残される。それも雑草に覆われて朽ち果てていく。何とかそれを守っていきたい。いわばまちのシンボルであった山城をこのまま朽ち果たさせてはいけない。城下にあった馬術の教練場あたりには大変立派な高遠のコヒガンザクラがたくさん植えられていました。その桜を城址に植樹しようではないかということで、旧藩士と住民とが一緒になって桜を移植した。これが明治の 8 年です。

当時のことですから、今のように桜を資源にしてまちおこしをしようとか、これを観光の資源にしようとかいう目的や意図はなく、失われつつあるアイデンティティを何とか確保したい。そういう思いで桜を植えたのではないかと思います。それが今になってこのような観光資源として効果を発現するとは、たぶん当時の人は思っただけではなかったのではないかと思います。樹齢 130 年を超す古木の高遠コヒガンザクラが、現在は新しい世代も交えて 1500 本咲いています。

篠田 ありがとうございます。やはりまちの 1 つのシンボルとし、城に代わるものとして藩士の人たちがつくっていった。非常にすばらしい話だと思います。

城址公園ということになると、実は今日はもう 1 つ、岡山県の津山の城址公園の桜があります。これは 1000 本あるという話ですが、こちらも何かきっかけがあったのではないかと思います。教えていただけますか。

宮地（津山市） いまお尋ねがありました津山城址に桜を植えた人を実は調べてきました。鶴山公園については岡山県内で唯一、日本さくら名所 100 選に選ばれている桜の名所です。

この桜の植樹に尽力をいたしましたのが福井純一という方です。福井さんは明治 11 年に津山市の本町 2 丁目というところに生まれ、津山成器小学校から同志社中学に進みますが、父が病に倒れたため中退して津山に帰られます。町議会議員から市制とともに市議会議員になり、昭和 7 年、第 3 代目の津山市議会議長に就任をしたそうです。県有地であった津山城址は、公園にするという条件で明治 32 年に津山町に払い下げられました。そして明治 32 年から津山町が公園化に手をつけ、福井純一も桜植樹の中心的な役割を担ったということです。

当時、城址に桜を植えることについては、非常に馬鹿げたことだと揶揄されたと聞いています。私財を投じて本人自らが寄付集めに奔走されたようです。明治 40 年ごろには公園としての様相が整い、その後、大正 4 年と昭和 3 年に御大典記念植樹が行われたということです。津山城址が桜で覆われるようになったのが、このころからであるとお聞きしています。そして福井純一さんは昭和 32 年、生涯の大半を津山城址の桜に捧げ、80 年の生涯を終えた。このように伺っているところです。

篠田 ありがとうございます。先ほど林先生の話の中に、桜というのは人を狂わすぐらいの魔力を持っているということがありました。福井さんという方は本当にその魔力に魅入られたというか、素晴らしいお話だと思います。

そういう点では犬山市もお城があるわけです。先ほどの発表だと、今の私の分類で言うと、どうも A タイプでもないし、B タイプでもない。また 1 つ新しいタイプではないかと思います。言うならば名もない市民といいますか、一般の庶民の方が河川の沿線に桜を植えていった。そういうものが財産となり、それを 1 つの基礎として、いま桜によるまちづくりをやっていらっしゃるのではないかと思うのですが、そういう理解でよろしいのかどうか、犬山市さん、よろしく願います。

岡田（犬山市） 先ほど篠田先生が A タイプ、B タイプに分けられ、実際どうお答えしようかと思っていました。まさに先生が言われたように、名もない方が植えた桜が市民の心の中にいま残っているということ。そして、先ほども少し話をさせていただきましたが、やはり歴史、文化というような資産の中でうまく桜が溶け込んでいるのではないか。そんな雰囲気の中で犬山のまちがいま成り立っていると思っています。

ただ、先ほど、このままではいけないということを申しましたが、こういう受け継いだ

資産を今度は桜の資産としてまちづくりにどう展開していくか。これがこれからの犬山市の課題だというふうに認識しています。

「桜による都市ビジョン」の3つの型 保存型・創造型・資源型

篠田 ありがとうございます。

A、B、そして新たにCタイプという3つのタイプがあるのではないかとということで頭を整理させてもらい、いよいよ桜による都市ビジョンについて話を進めていきたいと思えます。これも頭の整理のため、私なりに3つぐらいの型に分かれるのではないかと考えました。

1つは、Aタイプにしる、Bタイプにしる、非常に貴重な桜の資源を適正に管理し、後世にバトンタッチしていく。これ自体が非常に重要なことではないかということで、そういうことを基本に置いていっしやる。「保存型」といいますか、そういうビジョンが1つ。それから、先ほど犬山市さんから発表がありましたし、各務原市さんからも発表がありました。ある明確なビジョンの下に、新たに創造的に植樹をしていく。そういう「創造型」がもう1つあるのではないか。それから、桜だけに依拠せず他の花々とうまく組み合わせをすることにより、1つのイメージというものを売り出していこうという、「資源型」といいますか、そういう型。この3つぐらいの型が都市ビジョンとしてあるのではないかと思うわけです。

まず、「保存型」の都市ビジョンをお持ちの自治体に、上から順に質問をしていきたいと思えます。われわれは桜というとソメイヨシノがすぐ浮かぶのですが、話を聞いていると、新ひだか町にはどうもソメイヨシノはないような感じがいたします。自然の野生種というか、そういうものに一定のこだわりを持っていっしやるのではないか。これはこれでまた素晴らしいことです。いや、私が勝手にそう思っているのかもしれませんが、そこら辺についてどうでしょうか。

斉藤（新ひだか町） 先生がおっしゃるとおり、私どもの町はほとんどがエゾヤマザクラです。二十間道路の桜もエゾヤマザクラ。それと私どもの町木もエゾヤマザクラです。そういう1つの根底があり、この二十間道路の他に現在、都市公園等で桜の植栽をしているのですが、ことごとくソメイヨシノは入っていない状況です。ソメイヨシノを入れない正確な理由は定かではないのですが、町木になっている、あるいは先人から引き継いだのが

全部ヤマザクラであるといったようなことが根底に流れているのではないかと、想像しているところです。

篠田 ありがとうございます。昨日伺っていると、水質というのですか、土地の地質というか、そういう関係もあるのではないかという話がありました。やはり無理なことをしないで、その土地に合った品種を育てていくのは重要なことではないかと思いました。

仙北市さんに移ります。実は、桜の三冠王というのがあるのだそうですが、仙北市さんには国指定の天然記念物がありますし、檜木内川の堤防は国の名勝になっているそうですね。それから、さくら名所 100 選ということで三冠王。これはなかなか大変なことですが、もう 1 つ、実は 4 つ目に、これもやはりすごいことではないかと思うのは、市役所の中に「桜係」というのがあると聞きました。日本では唯一ここしかないのではないかと思います。どういうことをおやりになっているのですか。

富岡（仙北市） ほかの自治体さんだと、桜というと都市整備や観光課になるのですが、仙北市では教育委員会の文化財課が所管しています。今日ここに来ている黒坂という者が樹木医を取り、それをきっかけに桜係というものを独立させ、係制をとっています。現在、係はありますが、係長が兼務になっています。

篠田 桜係の歴史はかなり長いのですか。

富岡（仙北市） はい。角館町時代からあり、昭和 60 年ぐらいからです。

篠田 大変な先見の明だと思いますが、おやりになっているのは主にどういうことですか。

富岡（仙北市） 先ほど言いましたように、うちのほうではボランティアがあまり育っていません。それこそ剪定、消毒、診断は、大変申し訳ないのですが、黒坂にお任せしているような感じで、それを聞きながらやっています。

篠田 分かりました。それと、気になってどうしても聞いておきたいことがもう 1 つだけあります。檜木内川堤の桜並木は国の名勝になっているのですが、昭和 9 年に今の陛下の

誕生を祝って植樹したということですから、歴史そのものはまだ 80 年もたっていないわけですね。歴史は浅い、けれども国の名勝になっている。これはすごいと思います。

つまり、歴史があって初めて名勝になるのかとつい思っていたのですが、必ずしもそういうものではないということのようです。これについては何かいわれがあるのでしょうか。

富岡（仙北市） はい。先ほど言いました重要伝統的建造物群の武家屋敷がすぐ近くにあり、それと相まってということで名勝指定になっています。

それともう 1 つは、檜木内川が微妙にカーブしており、ある 1 カ所に立つと全貌が見える。そういうことで景観が良いということがあります。その 2 つでたぶん名勝に指定されたかと思います。

篠田 分かりました。どうも第 2 の名勝を狙えるようなところが他にあるような気がするわけですが、ヒントをいただいたかと思います。

北区さんは先ほどの説明の中では、八代将軍吉宗が、庶民がドンチャカやる場をつくってあげようとして桜の木を植えたということですが、現状はどうもソメイヨシノらしいんですね。吉宗さんのころといたら 1700 年代ぐらいですから、当時はソメイヨシノはたぶんなかったのだらうと思います。どういう桜を植えられたのか、本当に私は気になってしょうがないのです。お分かりでしたら教えてください。

道給（北区） 申し訳ありません。何を植えたかは不明ですが、浮世絵に飛鳥山の桜がかなり描かれているので、そういう意味では今後、そういうところから緋ければいいかと思っています。飛鳥山には現在でも、ヒガンザクラですとか、名前が分からないのですが、薄緑色の桜が咲いたりしており、いろいろな種類が入っていることは事実です。ですから今後、いま先生からヒントをいただいたので、解き明かしていければいいなと思っています。

森（各務原市） 今いいことをおっしゃったのですが、当時の浮世絵などに桜を描いたものが残っていて、薄緑色という話がありました。

道給（北区） 浮世絵に載っているのはピンクの桜です。私ども、春バージョンの名刺には桜の花が付いているのですが、薄緑は園内の端のほうにあるというのを広報誌などで私

も見ているというところなので。

森（各務原市） 吉宗公が植えた桜が浮世絵などに描いてあり、それが正しければ分かる方法があります。

道給（北区） そうですか。

森（各務原市） 各務原市に各務野櫻園というのがあります。国指定重要文化財の村国座といういい建物があり、その横を宮川という川が流れている。その対面に日本中の桜の種を全部集めた各務野櫻園という桜公園がつくってあります。これはどの桜公園よりも種類が多い。全部で 201 種類あります。先ほどの話をずっと聞いてきて、「ああ、うちにあるあれだな」とピンと分かります。ぜひいらっしゃい。

道給（北区） さすがですね。ありがとうございます。

森（各務原市） ちゃんとタダで見せます（笑）。

道給（北区） ありがとうございます。ぜひ勉強させていただきたいと思います。

篠田 ありがとうございます。実はこのサミットの良さというのは、ある自治体の疑問に対し別の自治体がひょっとすると答えられるかもしれないというところにあるわけです。実は今の飛鳥山の話については、吉野町さん、ひょっとするとこうではないかというお考えはありませんか。

山本（吉野町） 吉野は先ほど申しましたように 1300 年前から桜の地で、全国に桜をお送りさせていただいています。例えば、東京・上野にある寛永寺の桜も吉野の桜が行っていますし、東京の小金井市にある玉川上水にも吉野の桜が行っている。あるいはポトマック川。外国にも当然、行っています。イギリスにも行っています。その中で、これも記憶は定かではないのですが、飛鳥山にも吉野の桜が行ったという話を聞いています。これはもう少し調べさせてもらい、またご報告させていただきたいと思います。

道給（北区） よろしく申し上げます。

篠田 ありがとうございます。本当にこうしたやりとりをしてもらうのがこのサミットの良さですね。

時間の関係で次に進めさせてもらいます。五泉市さんは今回初めてこのサミットに参加されました。「五つの泉」と書くので、たぶん水が大変潤沢なのだろうと思うわけですが、ここも実は桜の三冠王なのです。先ほどの村松公園には3000本の桜があるそうですが、これがさくら名所100選。それから、小山田のヒガンザクラの樹林は国指定の天然記念物。もう1つ、先ほど少し紹介がありましたが、穂先八重彼岸桜は奈良時代の桜だそうです。

奈良時代というと西暦700年代です。そこからずっと生き延びている。1300年ぐらいの歴史になります。根尾の淡墨桜は1500年ですから、それまではいかなくても1300年の歴史があると考えていいのではないかと思います。この穂先八重彼岸桜は五泉市にしかないのでしょうか。他にもあるのでしょうか。そこら辺もご紹介いただければと思います。

伊藤（五泉市） 大変ありがとうございます。よそにあるかと言われても私も分かりません。失礼します。村松公園にあったわけですが、これも村松の一個人の方、2軒に2本しかなかった。それを戦前、村松公園に移植したということですが、もう3本しかなくなったわけ。それも2本が枯れ、1本も枯れ出したということで、平成20年にこれをどうして生き延びさせるかということになったのですが、種からするとなかなか育たない。ずっと育たなかったわけ。それが樹木医さんの紹介で隣の加茂市にある農林高校の生徒さんに培養していただき、蕾から発芽させて何十本とでき、道路に植栽したりしていますが、この平成で閉じることなく、いま科学の力を借りて生き延びているところです。

先ほど申しましたように、日露戦争の戦勝記念公園なので100年くらいたっています。ソメイヨシノも大変傷んでいますし、土壌改良など生育環境調査等をしています。ソメイヨシノは大きくなるのですが、この穂先八重彼岸桜は大木にはならない、本当に小さい木です。いま各務原市さんには桜の種類があるということですが、これはないのではないかと（笑）。ありますので今度送らせていただければかと思っています。これはいま全国に初めて紹介させていただいたのではないかと、篠田先生には大変感謝を申し上げる次第です。ありがとうございました。

篠田 ありがとうございます。日本ではまずめったに見られない花のようなので、ぜひともこの目で見てみたいという感じがしています。

ボランティア活動の中での桜と人のつながり

篠田 次に伊那市さんですが、先ほど三峰川の堤防の桜並木の話がありました。高遠城址まで2キロ、市民の手でということですが、いただいた資料では、そもそもの言い出しっぺが小学校の児童・生徒だった。それが植樹を始めたスタートだったと資料には書いてありますが、これもまたすばらしい話だと思います。これについて詳しくお話しただけですか。

松尾（伊那市） 三峰川は昔から桜が並木状に植えられていたのですが、これが河川改修に伴って切られ、昔あった堤防沿いの桜を何とか復元したいということで、地元の美篤小学校の生徒さんが5年かけて56本の桜を植樹しました。それがそもそものきっかけとなり、周辺の住民さんたちもこの56本につなげる形で植樹していこうということで、堤防沿いの地区ごとに現在でも継続して桜を植樹しています。これでかなり延び、先ほど2キロと申しましたが、小学校の生徒さんたちが植えた古い並木まで含めると、もう二千数百メートルの並木が誕生している状況です。

篠田 子どもたちが植え始めたのは何年ごろのことですか。

松尾（伊那市） もう15年ぐらい前ではないでしょうか。

篠田 インターネットで見させてもらいましたら、この小学校の5年生の子どもたちが公民館の中に「桜並木資料館」というのを開設したと載っている。いやいや、すごいなあ。本当に小学校の段階からこういうボランティア精神の塊というのは、またまたこれも日本にはあまり例がない話ではないかと思い、大変感心して見させてもらったというところです。ありがとうございます。

高山市さんは先ほど、地域のシンボルとしての古木を守っていくことを新しい総合計画で位置付けているという話でしたが、臥龍桜とか、荘川桜とか、大変ないわれと歴史のあ

る桜を「さくらを守る会」が守っていらっしゃるということでした。仙北市さんは市の直轄で対応していらっしゃる。それに対し、「さくらを守る会」というボランティアでやっていらっしゃる。かなり大切な役割をボランティアでやっていらっしゃるわけですが、皆さん心から喜んでやっていらっしゃるのか。経費などはどうなっているのかと思うのですが。

國島（高山市） ものすごく喜んでやってみえます。そして、ものすごく市役所に文句を言ってきます（笑）。確かに、その熱意が伝わってくるものですから、私どもが合併したときに、地域振興のために皆さん方が何に使うか自分たちで決めてくださいとあって、それぞれ旧町村の支所ごとに特別予算という予算枠を出しています。その中で、今年はこの作業があるからこういうお金を付けよう。その枠を皆さん方が自分たちで分配されるものですから、その中で費用としてやっていただく。ただ、例えば土壌改良を全部やってしまうとか、大きな事業になってくるとやはり行政の力でないとできないので、そういうのは市のほうでやらせていただくということです。

中には、支所に行くと言われる職員がいるものですから、「何かいややなあ」という者がいるわけです。しかし、そういうやりとりをする中で、本当に役所の人と地域住民の人との心が通うような動きが生まれていっていると思います。そのことにより、桜のことを逆に市役所の職員が教えられるというのですか。私どもは桜を守ることは命を守ることだという教え方をしているものですから、そういう意味で、職員が逆に勉強をさせていただくというパターンにもなっています。

篠田 ありがとうございます。銘木と言え、やはり天下の銘木の淡墨桜の話になります。淡墨桜はご存知の方が大変多いわけですが、かつて台風の後、管理が十分ではなかったために大変な状況に陥ったことがあり、宇野千代さんが知事に手紙を書いたという話があります。淡墨桜は単に本巢市あるいは岐阜県だけの財産ではなく、日本全体の財産だと思えます。そういう点では絶対に枯らしていただきたくないわけですが、現在、この管理についてはどのようになされていますか。教えてもらえないでしょうか。

青木（本巢市） いま篠田先生からご紹介いただいたように、淡墨桜は本当に日本の財産と言っていいかと思えます。本巢市においてはこの財産を後世にも引き継いでいくという

ことで、過去にはかなり大規模な再生のための外科的手術もいろいろ行ってきています。定期的な管理としては、年間経費としては100万ほどですが、地元の根尾開発という建設会社にいらっしゃる浅野さんという樹木医に定期的にチェックしていただき、管理を進めています。

また、枝が非常に広うございますので、枝も34本の支柱で支えています。この支柱も劣化しますので7年に1回は取り替えております。ちょうど今年24年度が取り替えの時期ということで、半分ほどは国の補助もいただけますが、500万ほどかかりますけれども、そういった形で管理を進めています。

篠田 ありがとうございます。安心しました。

いま「保存型」というタイプのところを聞いてきたのですが、今度は「創造型」といいですか、そちらに話を移らせてもらいます。各務原市さんの公園都市構想、それから39キロの桜の回廊という構想、これは本当にすごい。今まで延長距離の長さでは水上村さんのダムの周囲14キロが一番長いのかと思っていたのですが、それどころか39キロということです。そもそもこういう発想をされたのはどこにそのねらいがあったのか。そういう点について森市長にお尋ねします。

森（各務原市） あまり自分のまちのことを褒め過ぎてはいけませんので控えめに申しますと、冒頭言いましたように、各務原市の地形が非常にいいですね。北部は青い山脈が連なっているでしょ。南部が木曽川。そして南北に新境川、大安寺川という中小河川がある。その地形がとてもいいということです。したがって、都市ビジョンは「公園都市」。私の考えですが、人間が住むに値する都市というのは、結局は公園都市に行き着く。それが1つあります。

それから、桜は日本の花でしょう。幸いうちの新境川には密集度では全国有数の桜並木がずっとあるでしょう。その2つを足してグルッと桜の回廊計画をつくった。その前に、公園都市を目指すためにうちは「水と緑の回廊計画」というのを持っているんです。それとは別に桜回廊でグルッと回るということにロマンを感じて、それをやりつつあります。ポイントは、要するに成長木をたまたま本市にゆかりのある団体から毎年400本ずつご寄付いただけるということ。それから、市民のボランティアでそれを植樹する。そういうことがうちの特徴で、楽しみにしています。

以上です。

篠田 ありがとうございます。39 キロを植えていくというと何万本になるのか分かりませんが、植えた暁においてはやはり維持・管理をきちんとやるということが重要だと思います。それもボランティアでやる。植えるのもボランティア、維持・管理もボランティア。39 キロをそのようにやるというのはあまり例がないのではないかと思います。市民の皆さんは「待ってます。やらせてください」ということでしょうか。

森（各務原市） 要するに基本認識がね。私は 10 年ぐらい前からジーンと見ており、この国の歴史で最高にボランタリー精神がグーンと出てきたなという感じを持っています。そこで 10 年ほど前に、桜ということではなしに、「ボランタリーと連携する市政」というのを打ち出したのです。

各務原市の例を言うと、総務部から消防から各部があるでしょう。そのバックには必ずボランタリーがある。どういうボランタリーがあるか拾い出してくれという指示をし、ボランタリー団体を整理しました。たぶん当時は、そういう考え方がなかったのではないですか。そうすると例えばうちは、教育委員会のバックには教育ボランティアがあるでしょう。消防団のバックには消防ボランティアというのがあるでしょう。全部それがある。

ですから、ボランタリーと連携する市政を進めていけば、アクティブな市民の皆さんの血潮が市役所に入ってくる。市役所もまた、市民の皆さんに語るができる。相乗効果が発揮できると私は思います。したがって、ボランタリーと連携する市政の一環として、桜回廊都市づくりがある。こういう構えです。

篠田 ありがとうございます。他の自治体もぜひこれは見習っていかねばいけない話ではないかと思います。

先ほど犬山市さんの説明の中に、各務原市と盟約をしているという話がありました。今のような各務原市の取り組みの姿勢は、遺伝子ではないですが、犬山のほうにも伝わっているものでしょうか。

岡田（犬山市） はい。今回サミットも、「犬山、もう少し頑張れ」ということで、たぶん森市長のほうからお誘いを受けたのではないかと考えていますが、確かにいま市民団体

の方、そして職員同士も本当に仲良くやらせていただいています。こういう遺伝子はぜひ犬山のほうにも持っていきたいと思っています。

先ほど私は、市民の方は当たり前のように思っていると申しましたが、中には本当に技術的なものを持って桜に対し、今でもボランティアをやっていただいている方もみえますし、それを学ぼうとしている方もいます。ただ、全体的に見ると、まだまだその認識は低いということですが、先ほど言いましたように、私どもも「さくらねっと・うおーく」ということで続けようと思っています。川を挟んでも各務原から犬山まで桜の回廊が続くように、そしてまたそういうボランティアの精神もぜひ一緒に進めさせていただきたいと思っています。

篠田 「創造型」というと、もう1つ、大村市さんがあります。以前、大村市でサミットをやったわけですが、そのサミットをきっかけにまた新しく桜のまちおこしに拍車を掛けられたと聞いています。

先ほど、ボランティアの方が1000本の桜を植えたという話がありましたが、資料では、1つの自治会で「すずた千本桜公園」をつくられたということが書いてありました。各務原市のボランティアもさりながら、これはまた1つの公園を自分たちでつくってしまったということになるのかと思いますが、これについて詳しくお話しいただけますか。

吉野（大村市） 私もそこまで詳しくは知りませんが、すずた地区という大村市のある地域の中に広い土地があり、そこに何らかの形で自分たちの何かを残そうというようなことで、地域の方々だけで計画をされたわけです。われわれ行政はノータッチで、地域の方々自分たちで1000本の桜を植えておられます。他にもいろいろなボランティアの団体があるのですが、そこはまだ市のほうとトータル的なネットワークをもう少し整備していく必要があるかとは思っています。

篠田 ありがとうございます。

第1回開催の雲南市さん、先ほど斐伊川の2キロの桜並木の話がありました。こんな立派な桜並木ができるには、やはり何かきっかけがあったのではないかと思います。そのきっかけを聞くのを忘れていました。明治の終わりごろから植えたという話ですが、その後、何か歴史があったようです。これについてお聞かせいただければありがたいと思います。

木村（雲南市） この土手の桜は明治のころにも少し植えられていて、それなりにかわいがられていたけれども、あるとき警察署長が赴任をしてきて、「水の流れにはよくないので切れ」ということになって切られてしまった。しかし、地域の人としては何とかしなければいけないということで昭和初期から植えられてきて、その残りがいま咲き誇っているわけです。

そのときにやはり地域の人、それから子どもたちが水をやったりしてこられたということです。たまたま桜守さんなども番号札を付けたり、子どもたちもそれぞれ担当を決めてやっていたようです。そういった市民の桜に対する関わりが今のすばらしい桜並木につながったのだろうということです。

今あるようなすばらしい桜も全部切れというような非常に冷たい、厳しい状況もあったのが実態ということです。ただ、その陰には、その後の市民のボランティア的なところ、子どもたちの本当に献身的な水やり、そういうことがあってこそ今の姿があるのだそうです。この思いをつなげて、いま地域の人々がまた掃除をしたりしている。それからまた次の展開としては、さくらの会などにだんだんつながって大きな輪になってきて、今の姿があるということになっているようです。

篠田 ありがとうございます。伊那市さんでも三峰川についてはやはり切られた。それで小学校の子どもたちが先頭に立って植えていった。それと少しつながるようなことで、東西に同じような話があるんだな、非常にうるわしい話だなと思ったわけです。

津山市には作楽（さくら）神社という神社があるようです。少なくとも作楽神社というのが日本でここ以外にあるのかどうか私は分かりませんが、われわれとすれば大変ありがたい神社ではないかと思います。このことについてお話しいただけますか。

宮地（津山市） 後醍醐天皇が隠岐へ流されるときに児島高德という武将がいました。その武将が、「天勾踐を空しうするなかれ、時に范蠡なきにしもあらず」というような詩を幹に書いたという桜に因んで建てられたのが作楽神社ということです。この詳しい事情については私自身もあまり詳しくありません。この件についてはまた来年にでも詳しく話ができる者を連れて参りますので、どうぞよろしくお願いします。

篠田 ありがとうございます。サミットでありながら宿題を課すなんてとんでもない話ですが、ここは本当に桜についていろいろなことが分かる、インターネットにウィキペディアというのがありますが、まさにわれわれはウィキペディアで自主的に百科事典をつくっているような感覚がありますので、お分かりであればぜひとも教えていただきたいと思います。

水上村さんも平成 16 年に第 15 回のサミットをやっていただきました。ここは桜が大変有名であることは間違いありませんが、それだけに寄りかかっていない。ですから「資源型」ですね。近ごろの言葉で言えば、グリーンツーリズムをやっていらっしゃる。先ほどはセラピーの話も出ましたが、非常に自然の豊かな、大変いいところでした。サミットの時も地域のおばちゃんたちが田舎料理をつくってくれたのですが、これはもう最高でしたね。大量につくられたため二次会用にかっぱらって行く人がたくさんいましたが、それぐらいにおいしかったです。

確かあのときのサミットは、桜のシーズンを外して何とヒガンバナを見ましようというツーリズムをやって、「ああ、ヒガンバナでもツーリズムはできるんだな」という思いを持ちました。水上村さん、鹿が大変多くて困っているという話もありましたが、鹿は大変おいしい肉ですし、それも含めて PR をやっていただければと思います。

郷（水上村） お褒めの言葉をいただきありがとうございました。ツーリズムとしては、まずは桜で水上の名前を知っていただくということから入っていきました。いまヒガンバナという話がありましたが、まず春にはタケノコ。実は、昨日の日曜日はこのイベントをやっていました。私はこちらに来ましたので若手がやっていますが、タケノコ掘りの学校とか、「クリ拾いの学校」とか、うちの場合は「学校」という名前を付けています。

その中にヒガンバナの里をてくてく歩く学校ということでウォーキングがあります。こういった農業体験を通じたいろいろなツーリズムをやっていきます。その一環として、セラピーの中でも棚田なども含め、セラピーロードを構築してきました。まず、桜で名前を売り、農業体験をしながら、森林セラピーとか、ツーリズムとか、地元の方々と一緒になって進めているところです。

篠田 ありがとうございました。

ひとり発表をいただき、そしていろいろな質問をさせていただきました。あとわずか

ですが時間がありません。先ほどのことについて、ぜひとももういっぺん確かめて聞いておきたいというようなことがありましたら、それぞれ手を挙げて質問をしていただければと思います。ございますか。

いらっしゃらないようなので、私から新ひだか町さんに伺いたいと思います。資料の中に、オオムラザクラというのがある神社の境内で発見されたと書かれていました。オオムラザクラというのはまさに大村市さんのところにある、要するに南の地にある桜です。それがなぜか寒い寒い北海道で発見された。これはまた大変面白い話ではないかと思います。いきさつがまだよく分からないということでしたが、新ひだか町さん、その辺ご披露願えますか。

斉藤（新ひだか町） オオムラザクラは二十間道路周辺ではなく、実は合併した旧三石町にある歌笛神社の境内に200本ぐらいありました。その桜の種類等を私どもが教示いただいている桜守の浅利先生に確認していただいたところ、本当に最近ですが、オオムラザクラの植栽が発見されたということで、そこの保護はしています。

ただ、今日は大村市さんが来られているのですが、私どもはオオムラザクラを発見してから大村市さんのほうには連絡もしないで現在に至っています。このサミットを機会に大村市さんと連携をとりながら、その桜の由来と伺いますか、経緯というか、そんなところを今後調べていきたいと考えています。

今後のサミットについて

篠田 ありがとうございます。本当にサミットならではの話ですね。いきさつが分かれば、ぜひ来年開かれるサミットでお話いただければ大変面白いのではないかと思います。

先ほど、河川堤防に桜を植えていたが、それを切らされてしまったという話が出ました。私が調べたところでは、仙北市の檜木内川の堤についても、実は1972年ごろに、樹木が根を張り堤防に穴を開ける、そこで水がしみ込んで堤防が崩れてしまう、だから堤防上には樹木を植えてはいかんだということが河川法に定められていたのだそうです。

それに対し、何とか切り倒さずに済むことができないかというので、町民の中に知恵者がいらしたのです。河川法に対し、特別法の関係になる文化財保護法というのを使えば、切らなくて済むのではないか。そういうことを考えた人がいたらしいのです。文化財保護法なのかどうか私は分かりませんが、結果的には町が議会に提案し、この堤防を町道にし

た。町道であれば問題ないのではないか。それで桜が生き延びたというようなことが書いてありました。

河川法の関係で泣く泣く伐採したということではありますが、現在、河川法上、どういう問題があるのか、残念ながら私は調べていませんが、先人はいろいろな苦勞をして桜を守ってきたのだなということで、若干調べたところを披露させていただきました。

というふうにししゃべっているうちに、フリーディスカッションの終わりの時間がだんだん迫ってきました。総括に移りたいと思います。

今回、14 団体が打ちそろって各務原市でサミットが開催されましたが、以前、ある首長さんが、「自分はサミットとかいろいろな集まりに出るのだけれど、このさくらサミットだけは絶対に継続していきたいものだ」と熱っぽく語っておられたことを思い出します。桜というものはやはり、人間にそういう情熱を起こさせるものなのですね。桜は枯らしてはいけないし、さくらサミットも枯らしてはいけません。

今回、「全国」を冠して「全国さくらサミット」に名称が変わりました。折角「全国」と言う以上は、もう少し仲間を増やしてもいいのではないかという気がします。ここは開催地各務原市の森市長さん、全国と名乗る以上は得意の大風呂敷を広げてもらってもいいのではないかと思います（笑）、その辺のご決意はいかがですか。

森（各務原市） 全く賛成です。ご一緒に仲間を増やしましょう。分かりました。

篠田 ということで、ぜひとも仲間を増やしていくことが重要です。

先ほどから何回も紹介していますが、さくら名所百選、100 あるわけです。もう1つ、国指定の天然記念物がやはり全国に何カ所かあります。すごいなと思うのは、この地元岐阜県は国指定の天然記念物が5カ所あるんですね。新潟県も5カ所ある。5カ所あるというのは全国でもこの2つの県だけです。桜が天然記念物になっているとか、名所百選だとか、そういう自治体は間違いなくこのサミットに仲間入りし、一緒に議論したいという気持ちのところばかりだろうと思います。森市長さん、先ほどの話では、自分の名前でそういう市町村長に手紙を書こうかとおっしゃっていました。ぜひともそのようにしていただき、この輪を広げていただければと思います。

それと、実は今回の東日本大震災で東北は大変苦しい状況に置かれています。松の木が

1 本だけ残して全部枯れてしまった。そういう本当に悲しい話もあります。恐らく多くの桜もそのようなことになったに違いないわけです。

そこで吉野町さんのほうから、昨日、提案がありました。そこで、只今から吉野町さんから東日本大震災の桜に関してある提案がありますので、あらためてここでお聞き取りをいただきたいと思います。よろしく申し上げます。

山本（吉野町） 実は昨年、この各務原でサミットを開く予定をされていましたが、東日本の大震災で1年遅れました。東北でこのサミットに入っている自治体があります。例えば宮城県の柴田町、福島県の富岡町、こういうところは入っていますが、今日は残念ながら参加をしていません。

現在、東北のほうでは桜を復興のあかしとして植えようという機運がどんどん高まっており、大船渡とか、あるいはその沿岸部で行われています。実は、私どものほうにある企業を通じて、「福島県に1000本の桜を植えませんか」と言ってきました。私どもで1000本の桜を用意してもよろしいのですが、せっかくこのさくらサミットの自治体があるのですから、ここの方々が皆さん協力して少しでも桜の苗木を送ってあげればいいのではないかと。そういうこともあり、富岡町を中心に1000本の桜を福島県に送りたいと思うのですが、この点についてご賛同をいただけるか、お願いしたいと思います。

篠田 大変すばらしい提案でした。ここにお集まりの14の自治体の方々、今のご提案についていかがでしょうか。

（「賛成です」の声）

篠田 皆さん、どうですか。

〔拍手〕

篠田 会場のほうからも大変拍手をいただきました。ぜひとも日本を再生するシンボルとして、桜をわれわれのほうから提供したいと思います。

時間が来ましたので終わりますが、実は今回の第20回を記念し、サミットのホームページをリニューアルする予定とのことです。第1回から第20回までのいろいろな議事録なども載せます。今日お集まりの会場の皆さん方も、過去はどんなことをやったのかをお知りになりたいと思います。ぜひともそのホームページをお開きいただければ大変勉強になるかと思えます。

それでは以上をもって、この全体会議を終えたいと思います。ありがとうございました。
(拍手)

【共同宣言】 各務原市長 森 真

第20回全国さくらサミットは、全国14加盟自治体が一堂に会し、ここ岐阜県各務原市で迎えました。

桜を通じたまちづくりに積極的に取り組む全国の自治体が、本会議では『桜による都市ビジョン』『ボランティアと連携する桜』をテーマに討議を行い、わがまちの桜を大いにアピールしました。

桜は環境指標植物と言われ、清浄な空気とよい土壌、きれいな地下水脈に恵まれた大地に美しい花が咲きます。また、桜花は古事記・日本書記の天孫降臨編に既に現れ、古来より日本人に愛されてきたこの国の国花です。

私たちは、先人たちの思い入れを再認識し、100年後もそこに暮らす人々が誇れる桜のふる里であることを目指します。

昨年3月11日、本サミット加盟自治体の仲間が、東日本大震災の被害に遭われました。あらためてお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興を祈念申し上げます。私たちは、被災された皆様と一緒に、未来に向かって大きな夢を描けるまちを目指さなければなりません。桜の絆で結ばれた全国さくらサミット加盟自治体は、力を合わせ『夢ある都市』へ邁進する事をここに宣言します。

平成24年4月9日

第20回全国さくらサミット in 各務原

開催地代表

岐阜県各務原市長 森 真

北海道新ひだか町 / 秋田県仙北市 / 東京都北区 / 新潟県五泉市 /
長野県伊那市 / 岐阜県本巣市 / 岐阜県高山市 / 愛知県犬山市 /
奈良県吉野町 / 島根県雲南市 / 岡山県津山市 / 長崎県大村市 /
熊本県水上村 / 岐阜県各務原市

【次期開催地挨拶】津山市長 宮地昭範

津山市長の宮地昭範です。先ほどは、「第21回全国さくらサミット in 津山」ということで承認をしていただきました。本当にありがとうございます。心から厚くお礼を申し上げます。

実は、私どもが住んでいる津山市は美作国と言います。美作国が建国され、ちょうど来年で1300年を迎えるところです。このような記念すべきときに、素晴らしいサミットが開催できますことを心から喜んでいるところです。

ご承知のように、岡山県津山市は西日本に位置しているわけですが、まだ桜が満開になっていません。一般的には、皆さま方、「西日本だから、もう桜が散ってしまったのではないだろうか」とお思いでしょうが、本当に素晴らしい津山城の桜があります。ぜひ、来年は皆さま方にお越しをいただき、素晴らしいサミットを開催していただきたいと思っています。

また、せっかくの機会です。5月22日に東京スカイツリーがオープンするわけです。今から200年ほど前に、津山城主のお抱え絵師でした鋤形蕙斎と言われる方が『江戸一目図屏風』という非常に素晴らしい作品を残していますが、東京スカイツリーの展望台にその複製が常設展示されるという、津山市にとって非常にありがたいことが起こっています。

先ほど森市長から提案され、採択されました共同宣言の趣旨に基づき、古来から日本人に親しまれている桜を通じたまちづくりに全力で、今日お見えになっておられる多くの自治体の皆さん方とともに、絆をさらに強めてまいりたいと考えています。

どうぞ、これからもよろしく願い申し上げたいということと併せて、ぜひ来年は津山に足をお運びいただきたいということをお願い申し上げ、甚だ簡単ではありますがご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。（拍手）